
女王の首飾り

雨宮雨彦

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

女王の首飾り

【著者名】

彦雨宮雨彦

【ISBN】

9787333F

【あらすじ】

アンナは幼なじみで、男まさりの女の子。しかも騎士にあこがれている。

アンナはヘンリーとは同じ年で、幼なじみでもあったが、古道具屋の店先に並んでいたヨロイを見た瞬間に、彼女の心の中で何かに火がついてしまったようだった。

一人の家はどちらも村はずれにあり、学校までは距離があったので、毎日馬に乗って登校していた。だからヘンリーは、アンナの馬の背に一人で乗ることにすっかり慣れてしまっていた。ちょうど村の通りにさしかかったところだったが、古道具屋の前を通り過ぎようとして小さな悲鳴をあげてアンナは馬を止め、ヘンリーにたづなを押し付けて、ひらりと飛び降りてしまったのだ。馬が足ぶみをしたので、ヘンリーはたづなを引いて落ち着かせた。アンナは店の中へ入つていった。そして薄暗い店内に飾つてあつたヨロイを、これ以上はないほど熱心に眺め始めたのだ。

それはまったく古道具屋に置かれるにふさわしいものだった。あまりにも古びて、さびてくすんで、ほとんど真っ黒に見える。それでも上半身を包む胴着や左右のコテ、カブトと一緒にはそろつている。アンナはなかなか店から出てこなかつた。しびれを切らし、ヘンリーも馬から飛び降りた。店内をのぞきこむと、ヨロイを眺めながらアンナはほれぼれとした表情を浮かべている。「アンナ」ヘンリーは声をかけた。「早く帰ろうよ。おなかがすいちゃつたよ」

「『めん』『めん』」とうとうアンナが店から出てきた。店の主人に何かを手渡すのがちらりと見えたから、きっと手付金だったのだろう。

翌朝ヘンリーは、あのヨロイを買い取つたという話をアンナから聞かされた。昨日あのあと、貯金箱の中身をすべて持つてもう一度

店に戻り、買ひ取つたのだそうだ。昨夜は夜遅くまで磨いていたのだそうで、彼女は少し眠そうな顔をしていた。その日は行きも帰りも、ヘンリーは馬の上でヨロイの話を聞かされることになった。「大きなものではないけれど、胸のところに鋭い穴が開いているのよ。前の持ち主はさうと、心臓をヤリで一突きされたのだと思つわ」

「そんなものを買つて楽しこ?」ヘンリーは言つた。

「私、あのヨロイを自分で身につけるつもりなのよ」

「穴が開いてるの?」

「鍛冶屋さんで直してもらつわ。もうやの約束も取り付けたもの」

その言葉どおり、馬の背に乗せてアンナがヨロイを鍛冶屋へ運んでいく姿は、ヘンリーの家の窓からも見ることができた。アンナが言うには穴はすぐにふさがれ、見てもわからないほどきれいになつたといつひだつた。

「ハヤシアンナはヨロイに夢中だつたのだが、その間ヘンリーは、自分の中である不安が大きくなつていいくを感じないではいられなかつた。それについては誰にも話さなかつたが、数日後ついに現実となつて目の前に現れた。学期の最後の日で、明日からは夏休みに入るという朝のことだつたが、馬の上でアンナが宣言したのだ。

「私、明日の朝早く家出をするの」

「どうして?」

「本物の家出じやなごのみ。十四歳ぐらじて冒険の旅に出よつと思つたの」

「冒険？」

「だって」アンナは笑った。「私は騎士だもの」「どうして？」

「エロイを着た騎士なんだから、悪いやつをやつつけたり、怪物を退治したり、塔に閉じ込められたお姫様を助け出したりするのよ」

ヘンリーはため息をついた。これは本物に違ひなかつた。ここまで思い込んでしまつては、もういくら言つてもアンナは聞かないだろ？「それで？」ヘンリーは見つめ返した。

「だから君も、私の従者としてついてくるのよ」

「僕が？」

「当たり前よ。騎士には従者がつきものだわ」

ヘンリーは再びため息をついたが、アンナは気がつきもしなかつた。ポケットから手紙を一通取り出してヘンリーに見せた。封をして、ちゃんと切手も張つてあるものだ。宛名はそれぞれ、アンナとヘンリーの家になつている。「それをどうするの？」ヘンリーは目を丸くした。

「私と君の両親にあてて、『十日ほど旅行に出ますが心配しないでください』と書いたのよ。今からポストに入れるわ。明日の昼前には届くはずよ。誰も私たちのことは心配しないわ」

ヘンリーは三回目のため息をついた。アンナは何もかも準備をすませているわけだった。郵便ポストの前で馬を止め、アンナが二つの手紙を投げ入れるのをヘンリーは眺めていた。もうどんな行動を起こす気力も残っていなかつた。

翌日の夜明け前、ヘンリーは自分の家の前で待つていた。荷物を入れたカバンも準備して、足元に置いてあつた。すぐ隣にある家の門が開いて、足音を立てないように馬を引きながら、アンナが姿を現した。門を閉め、ヘンリーのそばへやつてきた。「やあ、わが従者よ。時間通りであるな」アンナは太い声を出した。

もちろんアンナは、あのヨロイを身につけていた。朝日を受けてきらきら輝いている。元は小柄な人物が身につけていたものですが、それでもアンナの身体には大きすぎた。本来なら笑い出すべき眺めなのだろうが、ヘンリーはそんな気にはならなかつた。アンナはひらりと馬にまたがり、手をつかんで、ヘンリーも馬上へ引っ張りあげた。アンナが腰に剣をさしていることに気がつき、ヘンリーは口を開いた。「その剣はどうしたの？」

「自分で作ったのよ」アンナは持ち上げてみせた。言われてみればいかにも手作り風で、柄は木でできている。きれいな色のヒモをまきつけて、飾りにしてある。

「刃はどうしたの？」

アンナはさやから引き抜いてみせた。「ただの木の棒よ。銀色に塗つてあるだけ」

そうやってヘンリーたちは村を離れていつた。人目の多い街道を避け、山へ向かつた。木も森もない岩だらけの山だが、「あつちの

「ほうがいかにも冒険が待つていてうじやないの」とアンナが言ったのだ。ヘンリーはと言えば、もつそろそろ両親が起き出して、自分がいないことを発見していることだらうと思えて気が重かった。だがアンナは何も感じていらない様子で、目の前に開けてゆく景色に見とれ、ほおを紅潮させていた。馬は急な坂道をゆっくりと登つていった。「もうすぐ砂丘が見えてくるはずよ」とアンナが言った。

「砂丘って？」

「砂浜みたいに砂がいっぱいあるところよ。小さな砂漠のようなものね。この先の高原はそうなっているのよ。その砂丘を横切つて、山脈の向こうがわへ抜けましょ！」

「それからどうあるの？」

「南へ曲がつて、海沿いにぐるりと回つて村へ帰りましょ。ちょうど十日間ぐらこの旅になるわ」

「その道筋のことも手紙に書いたの？」

「どの道を通りて、どこに町に泊まるつもりか、簡単な予定表は書いておいたわ。心配することはないのよ。お父さんたちは怒らないと思うわ。学校が始まつてから、みんなに自慢ができる楽しきじゃないの」

アンナは相変わらずお気楽だった。ゆっくりと揺れながら馬は登り続け、砂におおわれた大地が前方に見えてきた。「砂丘だわ」

ヘンリーは伸び上がつて眺めた。確かにアンナの言つとおりだつた。馬の足元が砂に変わり、ひづめがもぐりこむよつになつた。

「少し歩きましょうよ」アンナが馬から飛び降りたのでヘンリーも同じよろこび、一人は並んで歩き始めた。そろそろ太陽が高くなり、じつじつと照らし始めている。砂丘は海の波のようにテコボコして、山と谷がいくつも連なっている。岩山はもう背後に見えなくなっていた。

「ねえ、道に迷つたりしない?」ヘンリーはアンナを振り返った。

方位磁石を取り出し、アンナはにっこりした。「大丈夫よ。北へ向かつてまっすぐ行けばいいだけだから」

砂丘はずつと続いた。一時間歩いても景色はまったく変わらなかつた。空腹になつてきたので食べ物を出して歩きながら食べ、馬に少し水をやつた。ポケットから取り出した地図に田を落とし、アンナが口を開いた。「これで砂丘の大体半分まで来たのだと思つわ」

暑さと砂でいいかげんうるさりしていたので、ここまでと同じ距離をまだ進まなくてはならないのかと思い、文句を言いたくなつて、ヘンリーは口を開きかけた。異変が起こつたのは、そのときの「ことだつた。

足元の砂が突然動いたので、ヘンリーはもう少しで転んでしまいそうになつた。あわててアンナの手をつかもうとしたが届かなかつた。それでも何とか転ばずにすんだが、アンナと馬も同じ目にあつていることに気がついた。アンナが悲鳴を上げ、馬がいなないた。このときには、ヘンリーはひざまで砂につづまつてしまつていた。アンナと馬の足も同じように沈んでいきつつある。たづなをたぐり寄せ、アンナは馬の首にしがみついたが、何の意味もなかつた。少しの間は踏ん張ることができただろうが、時間の問題でしかなかつ

た。

もうヘンリーは胸までつづまり、悲鳴を上げ続けていたが、すぐに首まで砂に包まれ、あつと思つたときには目の前が真つ暗になつてしまつていて、身体全体を砂に囲まれ、足の下には何もなく、ただ落ちていく感覚だけがあつた。だが息苦しさはなく、どこかへ運ばれていくこうとしているのだということだけを感じていた。目的地がどこなのは、もちろんわからなかつた。ただ砂と一緒に落下を続けた。長い時間ではなかつたに違ひないが、ヘンリーはそのまま気を失つてしまつた。

目が覚めたとき、ヘンリーは平らな砂の上に寝かされていた。空は見えているがあたりは薄暗く、もう夕方なのだろうかという気がした。一人でぽつんと寝かされ、少し離れたところでは火がたかれ、たき火のようだつた。それを数人が取り囲んでいるが、炎がきらめくせいで顔がたちまではわからぬ。不思議な感じがしたのは、それが子供ではないふうなのに、みな背がとても低く見えることだつた。首を横に向けたまま、ヘンリーは見つめ続けた。彼らの話し声が聞こえてくる。

「なあ、そこのパンをもう一つとつてくれよ」

「あいよ」

どうやら食事をしているようだ。しかしへンリーは突然気がついた。彼らの背が低く見えるのは錯覚ではなく、本当にそつららしいのだ。大人なのにみなヘンリーと同じぐらいの身長の男女だ。女はすその長い古めかしい服装をしている。男たちの服装も同じように古

めかしいが、みなヒゲを長く伸ばしている。小さな瞳が、ときどき炎をぎらぎらと反射する。彼らの一人がヘンリーに気づき、ちゅんちゅんと仲間の肩をつついた。「おい、あいつが田を覚ましたぜ」

一人が立ち上がり、ヘンリーのほうへゆっくりと歩いてくるのが見えた。背が低いのによく太った男だが、歩き方はきびきびしている。ヘンリーの田の前にやつてきてかがみ、口を開いた。「起き上がることができるか? ケガはしていないか?」

「うん」ヘンリーは身体を起した。肩に手をそえて、男は手助けをしてくれた。

「名はなんといつ?」

「ヘンリー」

「ヘンリー、おまえはずいぶんと長い距離を落ちてきたのだぞ」

「どこから?」ヘンリーは思わず上を見上げたが、もうすっかり日が暮れ、真っ暗な夜の空が広がっているのが見えるだけだ。

「もうおん上の世界からさ」

「いりはまじ?」

男はかすかに笑つた。「下の世界を」

「下の世界?」

「あの砂時計が」男はヘンリーの背後を指した。「おまえを上の

世界から運んできたのだ。流れ落ちる砂と一緒にな

振り返り、ヘンリーは思わず小さな悲鳴を上げた。彼の背後には巨大な砂の山があったのだ。本当に大きなもので、高さがいくらあるのか見当もつかない。空高くそびえ立ち、完全な円錐形をして、大地に向かつてそはなだらかに広がり、その頂上へ向かつて、空のどこから砂が落ち続いているのだが、上空がどうなつているのかは暗すぎて見ることができない。だが砂は細い滝のようになつて、休むことも途切れることもなく流れ落ち続いているのだ。もちろん砂丘で見たのと同じ白い砂で、完全に乾いてサラサラしている。

「あれは砂時計なの?」ヘンリーは男を振り返った。

「そうさ。オレの名はスピニン。おまえを見つけることができて運が良かつた。でなければ、こんな荒地の真ん中ではおまえは数日と生きられなかつただろう?」

ヘンリーはまわりを見回した。巨大な砂山を除いては、本当に何もない場所だ。目の届く限り、皆だらけのゴジゴジした荒地が続いている。「あんたは何者なの?」ヘンリーはスピニンを振り返った。スピニンは、たき火の向こうに止めてある馬車を指さした。

「オレたちは旅の商人さ。首都へ向かつて旅をしていくのとこだ

「首都?」

「下の世界で一番大きな町だ。あと二日たてば、おまえもその眼で見ることになる

翌朝、馬車に乗せられてヘンリーは砂山の前を離れた。六頭の馬

が引く大きな馬車で、ときどき振り返って後ろを眺めたが、いくら進んでも砂山は遠くなるどころか、小さくなる気配もなかつた。それぐらい巨大なものだつたのだ。上空には滝のような砂の流れが太陽の光を受けてきらめきながらざつと続き、雲の裂け目を通つて青い空のかなたに見えなくなつていた。

スピングが言ったとおり、首都には三日で着くことができた。途中で二回野宿をしたが、三日目の朝には首都の大門に達することができたのだ。スピングは、この世界のことをいろいろと話してくれた。下の世界全体が一つの王国であり、ジュディスという女王が治めていること。何世紀も続いている歴史のある国で、ジュディスの城は首都の中央にあり、とがつた塔の姿をここからも見ることができた。

馬車を止め、大門が開くのを待つていて、スピングが指さして教えてくれた。大門のわきには石でできた大きな像が飾られていたのだが、「あれがジュディス様の像だ」とスピングは言ったのだ。このときヘンリーは、初めてジュディスの姿を目にした。

馬車は首都の中へと入つていった。ここまで来ると、いくら振り返つても砂時計はもう見えなかつた。首都といつても、木造の小さな家が昆虫の卵のように何千かかたまつてているだけのものに過ぎず、とても感心するようなものではなかつた。人通りの多い細い道を馬車はゆっくりと進み、頭を突き出して、ヘンリーはずつとキヨロキヨロしていた。

「あれがジュディス様のお城だ」とスピングが言った。小さな屋根が並んでいる向こうに、大門からも見えた大きな建物が一つだけぽつんとがつた屋根を突き出している。通りに面して布類を扱う大きな店があり、馬車はそこに立ち寄り、運んできた荷物を降ろしはじめた。この馬車は何百キロもの荒地を越えて、遠い町から布地を運

んできたのだ。筒状に巻いてあり、床の上にそれこそ何十も積み上げられたが、スピングが一つほどいて見せてくれたのだが、まっさらでとても美しい綿だった。

荷降ろしがすみ、ヘンリーたちは宿屋へ向かつた。金が入ったのでみな上機嫌で、ヘンリーもつられてニコニコ笑っていた。馬車と馬を預け、まず食事に出かけることになった。だが奇妙なことが起つた。宿屋の前に馬車を止め、地面に飛び降りたとき、建物の影から何人かの男たちが突然バラバラと飛び出してきて、ヘンリーたちはあつという間に取り囲まれてしまったのだ。

突然のことでヘンリーだけでなく、スピングたちもひどく驚いた顔をしていたが、革でできたヨロイやカブトの様子から見て、兵士だということはすぐにわかつた。いかにも隊長とその部下たちという感じで、偉そうな長い棒を持つてヒゲもじやの男がまず前に出て、口を開いた。「砂時計のそばでおまえたちが拾つたといふのはこの子供か？」

「やうだが」つばを飲み込み、スピングはそう答えるしかなかつた。

「ふん。こいつか」隊長は鼻を鳴らし、ヘンリーをじろじろ眺めた。

「何の用だ？ なぜこの子のことを知つている？」

「上の世界から落ちてきた子供をおまえたちが拾い上げたことは、もう町中の噂になつてゐる。おまえたちの馬車は飛びきり足が遅いと見える」

「それで？」

「その噂がジュディス様のお耳にも届いてな、お城へつれてこいとおおせだ。上の世界から来た者に一度会つてみたいとおっしゃつてな」

「ジュディス様が？」

「わうだ」

「しかし…」

だが隊長はもう何も言わずにヘンリーの腕をつかみ、そばに待たせておいた馬の背に乗せようとした。不安そうな顔で、ヘンリーはスピンを振り返るしかなかつた。だがスピンの表情から、兵隊には逆らつても無駄なのだと感じだけは感じ取ることができた。ヘンリーをクラの上に落ち着かせ、じろりと見上げて隊長は再び口を開いた。「オレの名はガガンボという。ジュディス様に仕えるガガンボ隊長だ」

そうやってヘンリーは城へ連行されることになつた。せつかく仲良くなつたのに、スピンやその仲間たちの姿を見るのはこれが最後になつた。城が近づいてくるにつれて、息苦しさが強くなつてくるのをヘンリーは感じないではいられなかつた。スピンから聞かされていたことから、ジュディスとは一種の魔女のような女で、五百年前からまったく年を取つていないということをヘンリーは知つていたのだ。顔にしわができることも老いぼれることも、跡継ぎを得ようとすることもなく、現在でもどんな老人の記憶の中にあるのと寸分変わらぬ姿をしているといつのだ。

そんな女王が自分を呼んでいるなど、思つただけでヘンリーはとても怖くなつた。今すぐ逃げ出したかつたがどうしようもなく、

ただ馬の背に乗せられて引っ張つていかれるしかなかつた。

城は本当にうすぐそこに見えていた。正面には門があり、怪物のよう大きく口を開けている。中庭で馬から降ろされたが、そこで若い侍女が待つていて、兵たちの手からヘンリーを受け取つた。見上げると目の前には屋根のとがつた背の高い建物があり、入口が開いていた。侍女に連れられ、ヘンリーはその中へ入つていくしかなかつた。廊下を歩き始めるとバタンと大きな音が聞こえ、振り返ると背後で入口の扉が閉められたところだつた。

3階まで上がり、居間のような広い部屋の中で女王はヘンリーを待つていた。廊下が突然終わり、気がつくとその部屋の中へ入つていくところだつたのだが、侍女はヘンリーを女王の目の前まで連れていき、立ち止まらせた。深くお辞儀をし、自分は部屋から出ていつた。音を立ててドアが閉まつて、ヘンリーは女王と一人きりにされることになつた。

女王の姿は、町の入口で見たあの石像と本当に同じだつた。五百年前に作られたという像だつたが、まるで魔法でもかかつているかのように、この女には年をとつた気配がまったく感じられなかつた。髪に一本か二本白髪が混じるどころか、目のまわりに小じわさえないのだ。ゆで卵のようにつるりとした肌で、ヘンリーをまっすぐに見つめている。恐ろしくて、ヘンリーは口を開いていいのかさえわからなかつた。だが突然女王が口を開いた。「砂時計に巻き込まれて上の世界から落ちてきたといつのはおまえか？」

ヘンリーは黙つてうなずいた。

「ふうむ」女王は少し感心した顔をした。「おかしなこともあるものだな」

「何が？」気がつくとヘンリーは、そんなことを口にしていた。女王はうれしそうに笑い、答えてくれた。

「私もそろそろ首飾りの秘密を誰かに打ち明けようと思つていたところさ。だが誰に打ち明けるべきかずっと迷つていた。ふさわしい相手を決めかねていたのだ。そこへおまえが落ちてきた。もしかするとこれは、打ち明けるのならおまえがもっともふさわしい相手であるといつことなのかもしれん」

「何を？」

「EJの首飾りのことだ」女王は自分の首のまわりを指をした。そこには太い銀色の針金のよつたものがある。首飾りといえばそういうのだろう。

「それがどうかしたの？」

「まあ座れ」女王は、ふかふかとした大きなイスを指さした。ヘンリーをそこに座らせ、自分も同じように腰かけて、女王は話し続けた。「私の名がジュディスだというのは知つていいよう？」

ヘンリーがうなずくと、女王は続けた。「私が500年間、まったく変わらぬ姿で生き続けているということを知つておるか？」

「うん」

「EJの町の入口に立つてゐる石像のことも知つていいよ。風雨を受け、500年間にあの像はすっかり古びてしまったが、私の姿は寸分も変わつておらぬ」ジュディスは立ち上がり、自分の姿を見

せた。

「わかるか？」 ジュディスは笑つた。

「うん」

「だがこれにはカラクリがあるのだよ」

「どんな？」

「見ているがいい」

ジュディスは腕を伸ばし、自分の首飾りに触れた。手にとつて首から抜き、そのまま外してしまつたのだ。光を受け、首飾りがきらりと輝くのがまぶしかつた。だがヘンリーを驚かせたのはそんなことではなかつた。彼の目の前にいるのはもはやジュディスではなかつたのだ。まつたく別の見たこともない中年の女がいて、ヘンリーの顔を見てうれしそうに笑つてゐるのだ。首飾りはこの女の手の中にある。だが断じてこれはジュディスではない。ヘンリーにはわけがわからなかつた。まるで手品のように、一瞬でジュディスがこの女と入れ替わつてしまつたのだ。

「わかつたかい？」女は歯を見せて笑つた。だがヘンリーは首を横に振ることさえ思いつかなかつた。

「ジユディスはどこへ行つたの？」

「あんたのこと？　ジゴディスがあんたに変身したの？」

「違う」女は首を横に振った。「ジユーテイスとまじの首飾りのことなのだよ。」この首飾りを身につけると、誰でもその姿がジユーテイスに変わるのだ。女王ジユーテイスとは代々、こうやって何十人の人間が演じてきたのだよ。五百年以上にわたつてな。それがジユーテイスの正体なんだ。私は一十五代目のジユーテイスだったのだよ

「どうして?」

「知るもんかね。私は先代からこの首飾りを渡され、役目を引き継いだだけ。もう三十年近くになる。だがそれも今日で終わりだ」

「なぜ?」

「今日で首飾りをおまえに譲り、私は引退するからさ

「なぜ僕にくれるの?」

「さつきも言つたであらう?..三十年もやればもう十分だ

「そうかなあ。僕だったら百年でもやつ続けるだらうけどな

「ならおやつ。これはもうおまえの物だ」女は首飾りを手渡そうとした。少しためらつたが、結局ヘンリーは受け取ってしまった。

「あなたは後悔しないの?」ヘンリーは女を見つめ返した。

「後悔も何も、私はもうジユーテイスに戻ることまでもないのを

「どうして?」

「その首飾りはね。一度でも外したが最後、もう一度ビジューデイスの姿に戻る」ことはできないのだよ」

「どうして？」

「やつてみせようか？」女はにやりと笑い、ヘンリーの手から首飾りをとつた。そしてもう一度自分の首にかけたが、本当にそのとおりだった。女の姿はまったく変わらず、ビジューデイスには変化しなかつたのだ。

「なぜそんなことになつてゐるの？」ヘンリーは目を丸くした。

「なぜだらうねえ。だがとにかくこうこうことなのさ。あんたも十分気をおつけ。一度外してしまつたらそれまでだからね」再び首飾りを手渡しながら女は言つた。

「うふ」もう一度受け取つたが、それでも首飾りを首にかける勇気をヘンリーは見つけ出せないでいた。冷たくずつしりと重い手触りを感じながら何となくためらひ、手の中でもて遊んでいたのだ。

「いいことを教えてやる」

「なに？」ヘンリーは顔を上げた。

「おまえはあの砂時計を覚えているだらう？」

「うふ」

「あんなに巨大でも時計は時計なのだから、時間を計るための道具

た。どこの誰がどういう目的で作ったのかは誰も知らないがね。あの砂時計は、すでに五百年以上も砂を落とし続いているのだよ」

「へえ」

「やつやって時間を計っているのさ。あの砂が落ちたとき、何が起ると言われているのだよ」

「何が起るの?」

女は笑った。「そこまでは誰も知らない。砂が落ちるのはまだ何百年も先のことだ。それを見届けることができるのは、今生きている人間の中には一人もあるまじよ」

「そうだね」

「だが、砂が落ちるときに何が起きるのかをその目で見る方法が一つだけある」

「どうするの?」

ヘンリーが目を輝かせたので、女は満足そうに笑った。「おまえがジュディスになることさ。首飾りを外しあえしなければ、ジュディスの姿のまま500年でも600年でも生きることができるのだよ」

なんとなくため息が出てくるのを感じながら首飾りをテーブルの上に置き、ヘンリーは窓に近寄つて外を眺めた。この窓は見晴らしがよく、町の様子を眺めることができた。ヘンリーは女を振り返った。「ジュディスになれば、この町は僕の物になるの?」

「町だけじゃない。下の世界のすべてがおまえの物になる」

ヘンリーはもう一度窓の方向をむいた。日が暮れかけて、町は何もかもが赤く染まって見えた。この世界でも夕焼けはこんな色をしているのだなという気がした。もう一度ため息をつき、ヘンリーは窓のふちにもたれかかった。ヘンリーの注意が別の方をむく瞬間をじっと待っていたのだろう。女が背後からそつと近寄っていることに、ヘンリーはまったく気がついてはいなかつた。

あつと思つたときには、首飾りはヘンリーの首にかけられてしまつていた。意外な重さと金属の冷たさを感じたがそれも一瞬のことで、気がついたときにはぐいっと背が伸び、まるでキリンにでもなつたかのように、せつきよりもずいぶん高い位置から町の風景を眺めることになつた。上を向くと天井が近く感じられる。振り向くと女がニヤリと笑い、壁にかかっている大きな鏡を指さすところだつた。ヘンリーは歩いていき、自分の姿を写してみた。

思つていたよりもジュディスの背が高いことにもう一度びっくりした。慣れるまではバランスを取るのに気をつけなくてはならないかもしない。いかにも女王らしくというべきなのか、ジュディスが着ているものは重く、これも慣れるのに時間がかかるかもしれないかつた。特にかんむりは、小ぶりなものだが金属でできてい、髪にはピンで留めてあるのだが、その先が肌に触れているのが変な感じだつた。だがこれも、そのうちになんでもなくなるのだろうとう気がした。

「さあて」軽く手をたたき、女がうれしそうに笑つた。「これで一仕事すんだわけだ」

ヘンリーは振り返り、相手を見下ろした。女はいかにもまぶしそうに見上げている。「三十年間慣れ親しんだ姿だが、いざ別人となつて目の前に立たれるとおかしな感じだねえ」

「そうかい？」

「そつそ、ジユディス様」女は歯を見せて笑つた。「後生だから、私の最後の願いをきいてくれるかい？」

「何なりと」

「家来を呼んで、城の外まで私を丁重に案内させてくれるかい？この城の連中は私の顔など知らないからね。曲者と思われて、牢に入れられたりしたくないのね」

「わかった」ヘンリーは歩きはじめ、部屋の扉に手をかけようとした。

「それともう一つある」

立ち止まり、ヘンリーは振り返つた。「何か？」

「そここの引き出しを開けて」女は指さした。「金貨を十枚ばかりもらえないかね？ 外で暮らしてゆくには必要だからね

ヘンリーは言われたとおりにし、女を城から送り出した。窓から見ていたのだが、門をくぐつて外へ出ていくとき、女は何度か振り返つて建物を見上げていたが、特に名残惜しく感じているようには見えなかつた。すつかり暗くなつた夜の町に女は姿を消してしまつた。

翌朝から、ヘンリーの新しい生活が始まった。平行して、城中の探検もはじめた。ヘンリーがどの廊下を歩き、ドアを開けてどの部屋に立ち入つても、のぞき込んでも、誰も文句を言わなかつた。よほどの用がない限り、話しかけられることもなかつた。そういう探検の途中、中庭を横切ろうとしたときだつたが、木の下に男が一人立つて、のんびりとタバコを吸つていてことに気がついた。もちろんヘンリーはそばへ歩いていった。

革のカブトとヨロイを身につけた兵隊で、見覚えのある顔だと思つたらやはりガガンボだつた。ヘンリーの姿に気づいて飛び上がり、背筋をピンと伸ばした。もう手遅れだつたが、タバコをあわてて背中に隠した。ヘンリーは近寄りづづけ、とうとう目の前で立ち止まり、そのヒゲ面を見下ろしてやつたのだ。ガガンボは石のように固まつている。ヘンリーは手を伸ばし、ヒゲの先をつまんでちゅんちゅんと引っ張つてやつた。ガガンボは痛そうな顔をしたが、逆らわなかつた。

「ふうむ。これは付けヒゲではなかつたのか

だがガガンボは何も言わず、ただ目を白黒させていた。こうやつてヘンリーは女王としての生活にだんだんと慣れていつたが、ある夜、奇妙なことが起こつた。もう真夜中で、ヘンリーは寝室でぼんやりしていた。なぜかまだ眠くはなく、ベッドに入る気にはならなかつたのだ。窓の外は暗く、町の明かりはほとんどがすでに消されていた。だがそこに、かすかな物音が聞こえたような気がしたのだ。

ヘンリーは耳をすませた。誰かが屋根の上を歩いているのだと気づくには、長い時間はからなかつた。窓に近寄り、ヘンリーはそつとガラスを押し開けた。すうつと冷たい空気が入つてくる。中

庭のどこかで虫が鳴き始めた。侵入者は屋根の上で息を潜めているようだ。何メートルと離れていないところにいるのだ。数歩下がり、ヘンリーは待つことにした。

だが何も起こらなかつた。いらいらし始め、じちらから声をかけてやろうかと思つたほどだ。しかしその瞬間、黒い影がさつとテラスに降りてきて、やわらかなボールのように弾んで窓を乗り越え、部屋の中へ飛び込んできたのだ。しなやかな体つきをして動きはきびきびしているが、緊張もしているらしくて、どこかぎこちなくもある。見当違ひの方向へ走り、足を止めてキヨロキヨロ見回した。ヘンリーは部屋のすみから眺めていた。侵入者は女だつたが、身体を伸ばして気づき、にらみつけるようにしてヘンリーを見上げた。懐かしさを感じなかつたといえはウソになる。それはアンナだつたのだ。

「おまえがジュディスか？」アンナが口を開いた。その声もとても懐かしくて、ヘンリーは駆け寄つて抱きついたいような気がした。だが自分の姿のことを思い出して、やめておくことにした。ヘンリーがにっこりと微笑むのを見て、アンナは意外そうな顔をした。「なぜ笑う？」

「なぜでもよい。何の用か？」長イスの前へ歩いていきゆつくりと腰かけると、ドレスがかすかな音を立てるのが、ヘンリーは自分でも耳に快かつた。

「ヘンリーを返してよ」とアンナが突然大きな声を出したとき、その名を聞くのはずいぶん久しぶりなような気がヘンリーはした。だが見つめ返し、こう口を開いただけだった。

「ヘンリーとは誰のことか？」

「私の友だちなの。砂時計に巻き込まれて、下の世界へ一緒に落ちてきたの。でも砂の流れの中で離れ離れになってしまった」

「それで？」

「下の世界へ落ちてきて、私は親切な町の人助けてもらつことができた。それからヘンリーを探し回つたの。そのとき噂を聞いたわ。スピノンという商人が拾い上げ、馬車に乗せてこの町へ連れてきたとわかつた。でもジュディスの兵隊につかまつて、ヘンリーはこの城へ連れてこられたのよ」

「だからおまえは「」へきたのか？」

「ええ」

「そのヘンリーを、おまえはなぜそこまでして探す？」

アンナの表情が変わつた。険しい顔つきだったのが、感情に押された泣き出しそうなものになつた。だがアンナはそれを何とか押さえ、口を開いた。「私が旅に誘つたのだもの。私に責任があるわ」

「なるほど」首を傾けながら、ヘンリーはアンナを眺めた。

「ヘンリーをどこへやつたの？」

「まず座らぬか？」ヘンリーは長イスを指した。だがそれは、言つても無駄なことのようだつた。

「ヘンリーをどこへやつたの？ 早く言こなさい」

「そりゃ怒鳴るな。家来たちが聞きつけたんだからさる」

「どうなつてもいい。ヘンリーは死にへ。」

ゆつくりと立ち上がり、ヘンリーはアンナに近寄った。アンナは警戒する様子はなかつた。口を大きく開き、また何か叫ぶそぶりを見せたのだ。ヨロイを着ているから大したことはないだろうとヘンリーは思った。おそらくケガなどしないだろう。ヘンリーはアンナの腕をつかみ、強く引いた。身長の差はあるのだ。アンナの小さな身体は軽く動き、一、二メートル宙を飛び、そのまま頭から壁にぶつかつていつた。大きな音がしたが、家来たちに気づかれることはなかつたようだ。床の上に伸びたまま、アンナは動かなくなつた。

机やイスを動かし、ヘンリーは部屋の中央を広く開けた。そこには四角いじゅうたんが敷かれている。アンナの身体を横たえ、ヘンリーはくるくるとじゅうたんで巻いて包んだ。それを持ち上げ、肩の上にかついで歩き始めたのだ。

廊下に出るとすぐにガガソボに出会いつた。今夜の見回り当番だつたらしい。暗い中をランプを手に歩いていたのだが、ヘンリーに気づいて立ち止まつた。しばらく間があつたが、とうとうガガソボは勇気を奮い起こしたようだつた。あのヒゲだらけの口を動かした。

「ジユディス様、こんな夜中に何をなさつていいのです？ そこには何をお持ちなのです？」

「馬を二頭用意せよ。遠乗りに出かける」

「二んな時間にですか？ そのじゅうたんは何ですか？」

「これは私のお気に入りでな。遠乗りの途中、どこかで休憩するときには敷いつと思つのだよ。早く用意をせよ」

軽くにらみつけてやるだけで、ガガンボはきびすを返した。馬屋へ向けて階段を降りていく足音が聞こえた。別の階段を通り、ヘンリーは中庭に出ることにした。じゅうたんの中のアンナはピクリともしない。一分もたたないうちに、一頭の馬を引いたガガンボが姿を見せた。まだ不審そうな顔をしているが、何も言わなかつた。

一頭の背にじゅうたんを乗せ、ヘンリーはナワでしつかりとくくりつけた。変なものを積まれて馬は面食らつてている様子だったが、おとなしくしていた。もう一頭にまたがり、じゅうたんを積んだ馬のたづなも引いて、ヘンリーは城を出ていった。何か言いたそうな顔をしていたが、やはりガガンボは最後まで口を開かなかつた。ヘンリーの背後で城門が閉じられた。

首都を抜け出し、荒地に差しかかつたあたりで、じゅうたんの中からうめき声が聞こえてきた。始めは何を言つているのかわからなかつたが、すぐにはつきりしたわめき声に変わつた。「こら、私を今すぐここから出せ」

ヘンリーは思わずにっこりしないではいられなかつた。あれだけ元氣があれば心配はないだろ。馬を止め、ナワをほどきにかかつた。背の低い岩山に囲まれているばかりで、まわりには家どころか小屋一軒見えない場所だから、誰かに目撃される心配はないだろ。月が斜めに低く照らしている。

じゅうたんの中から姿を現したアンナは、頭を激しく振つて、汗で張りついた髪を吹き飛ばした。手足をぽきぽき鳴らしてヘンリー

「城から連れ出すときこ、家来たちに見られたくなかったのでな」

「家来たち?」アンナはまわりを見回し、自分がいる場所に気がついた。「ここのはどう?」

「首都を少し離れた場所だ」

「私をどこへ連れて行こ? どうの?..」

「砂時計のどこへか?」

「何のために?」

「来ればわかる」空っぽのじゅうたんをくるくると丸め、ヘンリーは馬にまたがった。「おまえもついて來い。馬には乗れるのだろう?」

「バカにしないで」怒った声を出し、アンナがクラとたづなをつかんだのは言つまでもない。数日かかる旅になつた。途中の村で何度か食べ物を買おうとしたのだが、ヘンリーの姿を見るとみなすぐに逃げ出してしまい、どうしようもなかつた。だからヘンリーは村の外で待ち、アンナだけが店へ行くようになった。これでは宿に泊まる事もできないから、夜はじゅうたんを敷いて野宿するしかなかつた。

白いドレスを着たヘンリーの姿は、遠くからでもよく目立つに違ひなかつた。始めのうちは他の旅人の姿もときどき見かけたのだが、一日目には一人も見なくなり、街道は空っぽになつてしまつた。ジ

ユーディスが街道を進んでいくといふ噂が流れ、みな別の道ヘルートを変えたようだつた。旅の間アンナは口をきかず、黙つて下を向いていた。ヘンリーはときどき話しかけたが、多くの返事を引き出すことはできなかつた。そんなアンナも、たまには顔を上げて自分が口を開くことがあつた。だが話題はいつも同じだつた。

「本当にヘンリーのことば、あんたがきちんと面倒を見てくれるのね？」アンナは同じ質問を何度も繰り返した。そのたびにヘンリーは首を縦に振り、辛抱強く説明した。

「心配するな。私の城の中で楽しくやつてこなよ

「ヘンリーは、ずっとお城の中で過ぐすの？」

「ときどき外出すこともあるわ。併を連れて馬に乗り、街道を遠乗りしたりもする。休憩のときに使ひじゅつたんを持つてな」

「その後はどうなるの？」ヘンリーは一生あんたと一緒に過ぐすの？

？

「やうやく」ヘンリーはいつつした。「ヘンリーは私の息子になつたのだ。安心するがいい

「でも……」

「心配するな。一国の女王がウソをつくと思つか？」

日が暮れて休息するとき、アンナはヘンリーと同じようじゅつりの上に横になつたのだが、彼女はなかなか寝付けず、真夜中に何度も目を覚まし、目を開いてじつと星空を見上げてゐることにへ

ンリーは気がついていた。砂の中でもがくよくな身振りをしながら、「ヘンリー、ヘンリー」と寝言を言つこともあつた。

二日目の夕方、ヘンリーたちは砂時計のふもとに着くことができた。以前と同じ姿で、空のかなたから降り注ぐ砂を受けながらそびえ立つていた。本当に巨大で、顔を真上に向けないと視野におさまらないほどの砂だ。砂は常に崩れ続け、サラサラという音がかすかに聞こえてくる。ヘンリーが馬から降りると、アンナも同じようにした。

「ここで何をするの?」アンナは不安そうな声を出した。ヘンリーは馬たちのたづなをまとめて取り、そばに生えていた木にくくらついたところだった。振り返り、アンナの手を取つた。

「どうするの?」アンナはヘンリーを見上げて云ふ。

「行くやうだ。

アンナの手を取つたまま、ヘンリーは砂山に向けて一歩踏み出した。引きずられるようにして、アンナもついてくる。ヘンリーの左足が砂に触れた。だがその足は、砂にめり込んでしまうことはなかつたのだ。まるでエスカレーターのステップに乗つたときのように、そのまま砂の斜面にそつて上へ進み始めたではないか。ヘンリーは右足も砂に乗せた。右足もまた同じように上へと進み始めた。ヘンリーの身体は、砂たちによつて運び上げられようとしていた。

小さな悲鳴を上げて、アンナがしがみついてきた。ヘンリーは抱き寄せ、小柄な身体をしつかりとつかんだ。アンナもヘンリーの腰に腕をまわし、しがみついてきた。そうやってヘンリーたちは、砂の力で頂上へと運ばれていった。「何が起こってるの?」アンナは

震えていた。

「IJの国の女王とこうだけではなく、私は砂時計の管理人でもあるのだよ」

「管理人？」

「時計の途中に砂が詰まつたりしないよう見回ることも仕事の一つなのだよ。『じらん』ここに何が刻まれているかわかるかい？」自分の首飾りを手に取り、ヘンリーはアンナに見せてやつた。

「うん」アンナはうなずいた。「小さなかわいらしい砂時計の模様があるわ」

「セツコツ」となのわ」ヘンリーはこいつにして、アンナを見つめた。城で再会してから初めて、アンナも微笑み返してくれた。

ヘンリーたちは斜面を登つていった。振り返つてももう馬たちの姿は小さすぎて見えず、荒野の中を行く街道も細い糸のようでしかない。その上空には白い巨大な電球のようにして、丸い月が光つている。「どこまで登つていくの？」アンナが言つた。

「一番上までや」

もう砂の斜面は終わりかけていた。もうすぐ頂上で、空から滝のように降り注ぐ砂をそこで受け止めている。ヘンリーは描さした。

「『じらん』

「頂上まで来たのね」

「いい子だから田をお閉じ。そうしないと砂が入ってくるよ。あそこからは砂の中を進むことになるからね」

「息はできるの？」

「砂の中を落ちてくるとき、おまえは息苦しさを感じたかい？」

アンナは首を横に振った。ヘンリーたちは頂上に着き、とたんに全身を砂に包まれてしまつたが不愉快な感覚ではなく、それどころか砂たちが歓迎し、喜んでくれているのだとまで感じることができた。こうやって、ゆりかごのようになまめながら進む砂中の旅が始まった。自分たちの女王であるヘンリーだけではなく、砂たちはアンナも優しく扱つてくれた。目を開くことはできなかつたが、不安を感じず二人は身を任せていことができた。サラサラという砂の音だけが聞こえている。

だが安心していることができたのも、ほんの短い間のことしかなかつた。突然のことで一人はひどく驚いたが、どうすることもできなかつた。予告も何もなく、動物の尾のようなものが砂を突き破つて突然姿を現し、ヘンリーの右手に強くからみついたのだ。直径は人の腕の倍ほどもあり、冷たくやわらかく、ぬれたような表面をしている。強い力なので引きずり倒されそうになり、アンナが悲鳴をあげた。人間の力どころの強さではなく、逆らうことなど考へるだけ無駄だろう。あつという間にヘンリーは砂の外に引きずり出されることになつた。砂たちはヘンリーを守つとしたが、それでもこの尾の力にはかなわなかつた。

自由になるほつの手で、ヘンリーはアンナを自分の身体から引きはがそうとした。アンナは一人で下の世界へ落ちてしまふことになるが、正体のわからないものの前に引きずり出されるよりは安全だ

ろうと思えたのだ。だがアンナは言つことをきかず、ヘンリーの腕にしがみついてきた。だからアンナも一緒に砂の外へと引きずり出されることになった。

砂の中と回じよひこじこも真つ暗で、何一つ見ることができなかつた。砂が流れる音だけは背後にまだ聞こえているが、あの尾のようものは今ではヘンリーの腰に巻きつき、力任せに引っ張り続けている。転んでしまつてはいたが、アンナはヘンリーの腕にしがみついたまま、地面の上をずるずると引きずられている。空気のしつとりした感じと匂いから、土でできたトンネルの中にいることはわかるが、それ以上のことを知ることはできなかつた。腕を引き寄せ、ヘンリーはアンナを立ち上がらせることができた。「ケガはないか？」

「うん、何が起じてゐるの？」

「私にもわからぬ。おまえだけでも下の世界へ戻らせよつと思つたのだが」

「一緒に行くほうがいいわ。下の世界には知つた人はいなもの。誰があなたを引っ張つているの？」

「何かの動物の尾だ。私の腰に強くまきつこつてゐるのよ。このまま引っ張つていかれるほかなさうだ」

「何の動物なのかしら」

アンナがそう言つた瞬間、まわりが突然明るくなつたので、ヘンリーは顔の前に手をかざさなくてはならなくなつた。アンナも同じようにしてはいたが、それほどまぶしく感じられたのだ。それでも尾は、変わりなくヘンリーを引っ張り続けている。

田を細めて見回すと、思つたとおり土のトンネルの中にいるわかった。天井を含めてまわりはすべて茶色い土だが、透明なガラスかプラスティックのようなもので固められているから、ぼろぼろと崩れてくるようなことはない。引っ張つている者の正体に気がついて、アンナが「あ！」と小さな悲鳴を上げた。ヘンリーももう少しで声を上げてしまつところだった。なんと巨大なミミズだったのだ。バスの車体ほどの大きさがあり、身体を長く伸ばし、その尾の先がヘンリーの腰に巻きついているのだ。ホタルのようじぽんやりとではあるが、その体が青白く光つてゐる。それがトンネルの中を照らしているのだった。

「ミミズだわ」とアンナが言つた。それが聞こえたのかミミズはちらりと振り返つたが、歩く速度をゆるめはしなかつた。ヘンリーの手を離れて駆け出し、アンナはミミズを追い越していく。ミミズの前に立ち、両腕を広げて歩みを止めさせた。

「どうこいつもりだ？」ミミズの声が聞こえた。

「あんたこそどうこいつもりよ」もちろんアンナは言ひ返した。「この人が誰か知つてゐるの？ 下の世界の女王なのよ」

「知つてこるわ。だからこそ長老のもとへ連れて行こうとしているのだ」

「長老って？」

「それはおまえには関係ないことだ」アンナをよけ、ミミズは再び歩き始めようとした。アンナは両手でつかみ、おじとじめようとしたが、身体の大きさが違つすぎた。引きずられながら、またヘンリ

一は進み始めた。

「もう逆らわぬから、私の身体を放してくれないか」ヘンリーは背後から声をかけた。ミミズはちらりと振り返ったが、すぐに納得したようだつた。力が抜け、尾はヘンリーの身体から離れていった。アンナが駆け戻ってきた。

「大丈夫？」

「ああ」ヘンリーはにっこりした。「いささか失礼なミミズだが、危害を加える気はなさそうだ」

不満そうな顔をして、アンナは口を開きかけた。だがその前にミズが言つた。「失礼も何も、私はおまえを長老のもとへ連れて行くよう言い付かつた使者に過ぎない」

アンナは口をとがらせた。「失礼な口をきく一ヨロ一ヨロの使者だわ」

ミズはそれには答えなかつた。二人の前を行き、道案内を続けた。手をつなぎ、ヘンリーたちはついていくしかなかつた。トンネルは長く続き、曲がり角や交差点が何度も現れたが、ミミズは同じペースで歩き続けた。

「足が疲れたわ」とアンナが言つたが、トンネルの向こうに広い大きな部屋が見えてきたのはそのときのことだつた。アンナは口を閉じ、歩き続けた。ミミズに連れられて、ヘンリーたちは部屋の中へ入つていつた。

「まるで野球場のようね」というのが、アンナが最初に述べた感想

だつた。部屋はそれぐらい広く、形も丸かつたのだ。見上げると天井もドームのように丸く、伏せた茶碗の内側のような形をしている。二人は立ち止まり、口をぽかんと開けたまま、しばらくの間見上げていた。

「」の部屋の中央に立ち、ミミズの長老が一人を待っていたのだ。だが長老といつても特に身体が大きいわけでも、いかにも老人らしく皮膚がしわだらけというのもなかつた。ここまで道案内してきたミミズと特に変わつたところはなかつたのだ。その長老のまわりを何匹もの同じようなミミズたちが取り囲んでいる。みんなそれぞれ身体からぼんやりした光を放つてゐるから、部屋の中はとても明るかつた。「遠いところを来てもうつて申しわけない」長老が口を開いた。

「レディをこんなに歩かせるなんて、恥を知りなさい」アンナは元気が良かつたが、長老にじろりとこちらまれて、あわててヘンリーの後ろに隠れた。

「さつそくだが話したいことがある。長い話になるから、楽にしたまえ」長老は続けた。

ヘンリーと一緒になつてキョロキョロ見回し、アンナはまた口を開いた。「イスも何もないのね」

「」の地球にはどのくらいの数のセミがいるか知つておるか

仕方なく、一人は地面に直接腰を降ろすことにした。すぐにアンナはヘンリーに寄りかかり、顔を向けて待つてゐると長老が話し始めた。「」の地球にはどのくらいの数のセミがいるか知つておるかね？」

「セミ?」アンナは不思議そうな顔をした。「木にとまって、夏に大きな声で鳴くあの虫のこと?」

「そうや。セミの雌は地面の中に卵を生み、かえつた幼虫は木の根に取り付き、その栄養を吸収して成長する。幼虫はそうやって土の中で七年ばかり過ぐのです」

「知らなかつたわ」とまたアンナ。「すると木にとまって鳴いているセミはみんな七歳なのね」

「そういうことだ。毎年夏になると、地上では何百万匹ものセミが鳴いているであら? すると土の中には、その七倍の数の幼虫が潜んでいるところになると」

「地球の内部はセミの幼虫だらけってことね」

長老は微笑んだ。「それだけ多くの幼虫がいれば、とんでもない変わり者が一匹ぐらい混じつていっても不思議はあるまい? 生まれて七年目の夏が来ても、ある一匹が地上へ出ることをがんとして拒んだのだ。それどころか、そいつはまったく逆の行動を取つた」

「何をしたの?」

「地上へではなく、地下へ向かつて降りていったのだ。強力な前足を使って穴を堀り、一人でどんどん深いところへと潜つていったのだ。そしてまわりから栄養を吸収し続けた。その名はセミ丸といつたのだが、月日が流れ、セミ丸の存在は仲間のセミたちからもすっかり忘れ去られた。だがセミ丸は、その後も地球の中心近くでずっと生き続けていた。長い年月の間に、その身体はどう変化し

てこつたと思つね?」

ベンリーとアンナは顔を見合させた。「わからないわ

「ひとつもなく巨大になり、木の根だけでなく、まわりのありとあらゆるものから栄養を吸収することができるようになつておつた

「どうしていふことなの?」

「そのまま文字通りの意味だ。セミ丸は地上の海を走つてゐる戦艦と同じぐらいの大きさになり、それでもまだまだ成長を続けていた。しかも、地球そのものから栄養を吸い取ることができるようになったおつた」

「へえ」

「感心しておる場合ではないぞ。戦艦と同じ大きさになつたのが一百年前のことだ。今ではどのくらいの大きさがあるのか、さっぱり見当もつかん」

「セミ丸はまだ生きてこるの?」

長老はうなずいた。「それは間違いない。セミ丸に養分を吸い取られ、地球はもはやガタガタで干からびかけておる。わしたちの大切なトンネルがいくつも破壊され、何カ所も通行不能になつておる。もう地球は、あちこちヒビの入つた壊れかけの茶碗のようなものだ」

「地球は虫食いのソンゴみたいになつちゃつてこるのね」

「まあ、そのようなものだな」長老はかすかに笑つた。

「だけど、それと私たちどうづ関係があるの？」アンナは不思議そ
うな顔をした。長老はゆっくりとため息をついた。

「わからぬか？ 地球が粉々に壊れてしまつたら、地上にいる人間
たちも無事ではすむまい？」

意味に気がつき、アンナははつと息をのんだようだつた。ヘンリ
ーは口をはさむ気になつた。「しかし、それはセミ丸にとつても同
じことなのではないか？ 地球がなくなつてしまつたら、セミ丸も
生きてはおれまい？」

長老は首を横に振つた。「考えてごらん。そんなへそ曲がりが先
のことなど気にすると思つかね？ やつはまったく何も考えずに生
きておるのじやよ。それにだ、地球がなくなつてしまつても、もし
かしたらやつはもう平気なのかもしけない。今度こそ脱皮して巨大
なセミとなり、他の星へ飛んでいけばよいと思つているのかもしれ
ないではないか」

「まあか」アンナはあきれたような声を出した。

「だが、事実をつらじいのだよ」長老が言つた。

「ジユディスはじつ思つ？」アンナはヘンリーを振り返つた。

「事実なかもしれないな」ヘンリーは答えた。「それで私にどう
じつと？」

数日間、一人はミミズたちと一緒に過ごした。小さな部屋をあて
がわれ、そこで寝起きをしたのだ。ベッドはなかつたが、乾いた木

の根をやわらかくほぐしたものが一山置かれ、その上で眠った。長老の娘にリンク姫というのがいて、親切に世話をしてくれた。ミミズとしては少し小柄だったが、くすっと笑うときに首をわずかにかしげるのがかわいらしかった。一人とも気が合ひ、おしゃべりをして長い時間を過ごした。

長老と毎日話し合ひ、少しづつプランができていった。だが大体の計画が固まつたところで、アンナが不満そうに口をどがらせた。「だけどそもそも、なぜジユディスがそんなセミをやつつけに行かなくちゃならないの？ 地球の中心へなんて、何が起こるかわからぬ危険な旅なのに。ミミズたちが自分で行けばいいじゃないの？」

「やつはいくまいよ」頭を左右に振り、長老は笑つた。「そういう旅だからこそ、何が起こるか予測がつかん。火のようにな熱い場所を通ることになるかもしだん。地下水の中を泳がなくてはならないかもしれません。わしたちにはとても無理だ」

「だからジユディスが行くつていうの？ 私は気に入らないわ」

ヘンリーはアンナを見つめた。「おまえが気に入ろうが入るまいか、私は行くつもりでいるよ」

「どうして？」アンナは目を丸くした。

「地球が壊れてしまつては、みんな困るだろ？ 私には『下の世界』の安全を守る義務がある。砂時計が壊れてしまつのも困るではないか」

そうやって何日かたち、ヘンリーが出発する口がやつてきた。アンナはもちろん一緒に行くと言い張つた。何時間も議論してやめさ

せようとしたが、彼女は頑固だった。結局ヘンリーが折れるしかなかつた。

///ズたちは、地球の中心へ向かつて降りていくための乗り物を用意していた。オウムガイの化石を作り変えたもので、内部はちょっとした部屋のように広く、一人でも楽に乗り込むことができる。この乗り物には丈夫な鎖が結び付けてあり、それを長く伸ばして、地下へ向かつて開いた深い縦穴の中に降ろしていくというわけだつた。「まるで井戸で水をくむつるべみたいね」とアンナが言つたが、まったくそのとおりだつた。

鎖は巨大なワインチにつながり、何世紀前のものか知らないが、ひどく古めかしい形をしたエンジンの力で動かされるようになつて、必要な荷物を積み込み、とうとう準備がすんだ。オウムガイはもう縦穴の真上につけられ、氣楽そうにぶらぶらと揺れいる。エンジンもうなりを上げている。縦穴は、地下鉄のトンネルと同じぐらいの直径がある。穴のへりに寄り、アンナはこわごわ見下ろした。「本当に井戸みたいな感じね。この穴はどこまでつながつているの?」

「正確なことは誰も知らないのだよ」長老が答えた。「どれだけ深いのかもわからん」

「セミ丸がいるといつまで本当につながつていてるの?」

「それは確かだ。地球の中心へ降りていくときにセミ丸自身が掘つた穴だから、やつがこの下のビニカにいるのは間違いない」

手を取つて、ヘンリーはアンナをオウムガイに乗り込ませてやつた。続いて自分も乗り込もうとしたが、リンゴ姫が突然進み出て、

ヘンリーの手にほおずりをしてくれた。「どうかご無事で」

彼女のほおにそっと触れ返し、ヘンリーはアンナの隣に座った。長老が合図をし、エンジンの音が大きくなり、一度ガクンと揺れてから、オウムガイはゆっくりと動き始めた。

縦穴の中に入ってしまった、ミミズたちのお別れの声もすぐに聞こえなくなつた。エンジンの音はまだしばらく聞こえていたが、それもゆつくり小さく遠くなつていつた。鎖だけがときどきギギギと鳴つた。オウムガイの中は薄暗く、明かりは小さなランプがあるきりだ。窓から顔を突き出し、ヘンリーは外の様子を眺めた。アンナも隣へやつてきた。上を向いても、もつミミズの国は白い小さな点でしかなかつた。縦穴はずつと同じ調子で続いている。下をのぞいてみたが、真つ暗なだけで何も見えなかつた。

変化のない長い道中になつた。ときおりクサリが鳴るだけで、それ以外は本当に何も起きないのだ。おしゃべりにも疲れ、壁にもたれかかり、アンナはうとうとしかかつてゐる。だがそういう退屈も、いつまでも続くものではないのかもしかなかつた。予告も何もなく、突然オウムガイが大きく揺れたのだ。同時にどこか上のほうで、ドスンという物音が聞こえたような気がした。

「きやあ」アンナが悲鳴を上げ、しがみついてきた。肩に触れてアンナを落ち着かせ、ヘンリーは窓に駆け寄つた。そして窓の外から何かの目玉がこちらをのぞきこんでいることに気がついた。その目玉とともに視線を合わせることになったのだ。

「あれは何?」アンナも気がつき声を上げたが、ヘンリーも息をのみ、身体を動かすことができなくなつてしまつた。それほどどんでもない代物だつたのだ。とても大きな目玉で、スイカほどの直径が

ある。形は口ロソと丸いが、瞳は猫のように縦に裂けている。緑色をして、なんとなく笑っているような雰囲気がある。だから見つめられるうち、恐ろしいところ気持ちはずつくりと消えていき、アンナが口を開いた。「失礼なやつね。のぞき見をしているわ」

窓に近寄り、身を乗り出して見上げ、ヘンリーは田玉の持ち主の正体を知ることができた。長さが一メートルばかりあるヘビだったのだ。田と同じように緑色をしたウロコで身体全体がおおわれている。胴はどうやらム缶ほどの太さがあるが、しなやかでやわらかそうで、オウムガイをつり下げる鎖に巻きつけて身体を支え、首だけをだらつと低くして窓からぞきこんでいるわけだった。サイズが違う他は地上のヘビと同じだが、もう一点違っているのは、田が一つしかないことだった。顔の中央に大きな田玉が一つあるきりなのだ。ヘンリーと向かいあつてうれしそうに笑い、やはり緑色をした舌をちらりと見せた。「口の中まで緑色なんだわ」ヘンリーと並んで、アンナも窓から身を乗り出した。

「ここな地の底へお寄とは、珍しいこともあるもんだね」ヘビは田玉をぎょろりと動かした。

「口まだきくわ」アンナはあきれた声を出した。

「オイラに言わせりや、あんたらここ地上の生物のくせに口をあきやがるつてことになる」ヘビはもう一度笑った。「地下には、地上よりもずっと古い時代から生き物が住んでいるのだからね。オイラたちのほうがよっぽど先輩や」

「ふん」

「ヒーリードヤ」ヘビは声の調子を変えた。「もしかして、あんたは

ジユテイスかい？」

「なぜそつ思つ?」ヘンリーは口を開いた。

「地底に住んでいる者であんたのことと知らない者はいないさ。今日は地球の中心へお出かけかい? 何の用事があるのか質問したら、失礼に当たるかい?」

「セミ丸を退治しに行くのよ。邪魔するとあんたも退治しちゃうよ」腰にさしていた剣を抜き、アンナはベビに向けてブンブン振り回した。

「ほつ」ベビは丸い目をもつと丸くした。「それは大ニユースだ」ヘンリーは言つた。「あまり触れ回らないで欲しいな。セミ丸に気づかれて、警戒されたくない」

「触れ回つたりなんかしないさ。オイラだつてセミ丸のことは気にしているよ。あいつのせいで、地球は本当にガタガタになつてゐる。誰かがあいつを退治しなくちゃならない」

「協力してくれるの?」アンナは顔を輝かせた。

「どうかなあ。道案内ぐらいはできると思つが。オイラと出合えて、あんたたちは運がいいよ。崖崩れのせいで、この縦穴はもう少し先で行き止まりになつてゐる。オイラがいないと、あんたたちはすこすこ引き返すしかなかつたはずさ」

「なんだつて?」

「おやおや、そつぱつてこるわにもつ終点だ」ベビはちらりと前方を見たようだ。「揺れるから、どこかにつかまつたほうがいいぜ」

「ベビの言ひ方とは本当だつた。ドスンと大きな音がして、オウムガイは停止してしまつたのだ。何かにぶつかったのに違いない。「ほら、オイラの言つたとおりだろ?」ベビはパチンとウインクをした。

「どうなつてゐるの?」アンナは身を乗り出し、下を眺めた。ヘンリーも同じようにしたが、碎けた岩が散らばり、まるでフタでもされたように穴がふさがつてしまつてゐるのが見えた。ドアを開け、アンナはぴょんと外に飛び出した。オウムガイの全重量が乗つているはずだが、足元はびくともしない。完全にうずまつてゐるのだ。

「これからビツするね?」なんだか楽しそうな顔で、ベビはヘンリーとアンナを交互に眺めた。

「あんたの名前はなんていうの?」首をかしげ、アンナはベビを見つめ返した。ベビはもう鎖に巻きつくるのはやめ、今は岩の上に身体を横たえている。アンナは気軽に歩いてこき、その胴にちょっと腰かけた。それを見てヘンリーは田を丸くしたし、ベビも同じような表情だつたが、怒つてゐる様子はなかつた。

「オイラはウロコ丸つていつのせ」

「私はアンナ」気楽そうにアンナは足をふらふらさせ始めた。

「それでアンナ、これからビツするね?」機嫌よみがへり、ウロコ丸は尾の先をちょりと動かした。

「知らないわ。やつこつ」とはジユティスが決めるのよ」

「ウロコ丸」ヘンリーは言った。「地球の中心へ降りていく道は、この縦穴以外にはないのかな？」

「他の道もなくはないよ。あんたたちがお好みかどうかは知らないが」

「どんな道なの?」アンナは身を乗り出した。

誘つようになにウロコ丸はくいと頭を動かした。「つこてこじよ。道案内してやる」

オウムガイから取り出した荷物をそれぞれ持ち、ヘンリーたちはウロコ丸と一緒に歩き始めた。「あんたも少しごらい持ちなさいよ」とアンナは言い、小さなカバンをウロコ丸の首にかけてしまった。ウロコ丸はあきれたような顔をしたが、何も言わずにはんりーと顔を見合わせた。

手近な岩の割れ目にひょいと頭を突っ込み、ウロコ丸がその中へあつという間に姿を消してしまったのは、まるで魔法のように見事な眺めだった。ヘンリーたちは立ち止まり、感心して見ていたが、もちろんすぐについていくことにした。ウロコ丸は尾の先端をちょっとちんのよに光らせていたので、それを頼りに進むことができた。

岩の割れ目は思つほど狭くはなく、くねくね曲がりながらずつと伸びていた。足元はテコボコしているが、歩きにくくなかった。少し広い場所に出るたびにウロコ丸は振り返り、ヘンリーたちがちゃんとついてきているか確かめていた。もう少し進むと割れ目はさらに広くなり、歩きやすくなつたので、ウロコ丸が話しかけてき

た。「あんたたちは、どうやってセミ丸を退治するつもりでいるんだい？」

「これよ」ポケットに手を入れ、自慢そうに取り出して、アンナは小さなガラスびんを見せた。内部には黒い粉が入っているが、今はしっかりとフタがしてある。

「それはなんだい？」

「ミミズたちから渡されたの。何かのカビの胞子だそうよ。私たちはこれをセミ丸の身体に植えつけるのよ」

「胞子？ カビの種みたいなものかい？ それを植えつけると何が起ころるんだい？」

アンナは声を小さくした。「それは私たちも知らないのよ。百年ぐらい前にミミズ一族のある学者が作ったものらしいけど、セミ丸に植えつける方法がなかつたから、使われずにしまわっていたの。だけどその学者ももう死んでしまつて、これを植えつけると何がどうなるのか、今では誰も知らないのよ」

「へえ、それはちょっと楽しみだなあ」

ヘンリーたちは歩き続け、やがて広い場所に出て、岩の割れ目は終わりになつた。終わりというのは文字通りの意味で、床がなくなり、その先は深い穴がいっぱいに口を開けていたのだ。まるで垂直な井戸のような眺めだったが、学校の校舎だってすっぽり入つてしまいそうな直径がある。へりに立ち止まってのぞき込んだが、もちろん真っ暗なだけで何も見えなかつた。どこまで続いているのか見当もつかず、セミ丸が開けていった穴よりもはるかに大きく、真下

を向いてパイプのようにすとんと伸びて居るのだ。「これは何の穴なの?」アンナが言つた。

皿玉をぐるりとぬぐらせ、ウロコ丸はヘンリーたちを眺めた。「この穴は地球の中心まで一直線に達しているんだぜ」

「どうして?」

「大昔、地球がまだ溶岩のよつて熱くドロドロに溶けていたころ、中心部で巨大なガスの塊が発生し、それが地表まで一気に上昇したことがあったらしい。これはそのときにできた穴さ。だからこそ、この穴に小石を落としたらどうなると想ひつ?」

「地球の中心へ向かつて落ちていくわ。当たり前じゃないの」アンナは鼻を鳴らした。

「やうだよな」ウロコ丸はうれしそうに笑つた。「じゃあ、ちょっとやってみるぜ」

尾の先で起用に小石をつまみ、ウロコ丸はひょいと放り投げた。もちろん石は穴の中を落ちていき、音もなくあつという間に見えなくなつてしまつた。ヘンリーとアンナが顔を見合わせていると、ウロコ丸が言つた。「なかなかいいアイディアだな? 地球の中心まで直行使だぜ。あんたたちも、今の石のようになりますすぐ落ちていけばいいんだ」

「バカ言わないで。ものす」スピードがつくはずよ。ブレーキがないじゃないの」アンナは皿をむいた。

「ブレーキは作ればいいさ」ウロコ丸はにやつと笑い、ヘンリーた

ちが手にしている荷物を「」の先で指さした。

「エンリーたちは準備に取りかかるしかなかった。ウロコ丸は尾を伸ばし、その先端を強く光らせ、電気スタンドのようにして手元を照らしてくれた。毛布を取り出し、丈夫なロープを結び付け、エンリーたちはパラシユートを作り始めたのだ。手を動かしながら、「こんな地の底で、なぜお裁縫なんかやらなくちゃならないのよ」とアンナはさかんにブツブツ言つていた。

準備がすんだとき、エンリーたちはひどく奇妙な格好をしていたが、ウロコ丸は笑わなかつた。面白そうに眺めてはいた。エンリーもアンナも、パラシユート代わりの毛布を手首と足首に結び付けていたのだ。背中には荷物も背負つっていたから、きっと引越しの日のように見えたに違いない。とうとうウロコ丸が声を上げて笑い始めた。「うるさいわね。私たちは地球を救うために行くのよ」とアンナは大きな声を出した。

「えへん」ウロコ丸はせき払いをした。「ではそろそろ出発するかい?」

「だけどヤミ丸を退治した後、私たちはどうやって地上へ帰つくるの?」

「心配するな。オイラが迎えにいつてやるよ。約束するよ」

「だけど…」

「大丈夫さ。さあ張り切つて行つてこいよ」返事も聞かずに尾を動かし、ウロコ丸はエンリーたちの背中をぽんと押したのだ。だから次の瞬間には、エンリーとアンナは穴の中央にほうり出されていた。

もちろん足の下には何もない。地球の中心へ続く穴が真っ暗に口を開けている。しかも明かりは、それぞれが持っている小さなランプだけだ。

「やつほー」大きな声が聞こえたので顔を上げると、ヘンリーはアンナと目が合つことになつた。見つめ返して、アンナは口を大きく開けて笑つた。「すごいわ。滝の上から飛び込むときみたい

確かにアンナの言うとおりかもしだなかつた。まわりの壁がとんでもないスピードで後ろへ飛び去つていくのだ。岩の割れ目やデコボコなど、すぐに見分けることもできなくなつた。ヒトデのように手足をまつすぐに伸ばしたまま、ヘンリーたちは落下していった。

「こんな経験は、同級生の誰もしたことがないに違いないわ」アンナの弾んだ声がじづじづといつ風の音に混じつて耳に届き、ヘンリーはちらりと上を見たが、ウロコ丸の姿などもうはるかかなただ。毛布はいっぽいに広がり、全力でブレーキをかけている。あるところまで行くと、まわりの壁もこれ以上速くなる気配はなくなつた。重力とブレーキがうまくつりあい、速度が一定になつたのだろう。

ヘンリーは見回し続けたが、穴の大きさは長い間変わらなかつた。だが不意に、穴が大きくなり始めているのではないかという気がしてきた。もう一度見回し、そうだと確信することができた。穴がもうどのように広くなりつつあるのだ。パラシユートの準備をしている間にウロコ丸が話してくれたことをヘンリーは思い出した。ずっと進むと穴は一気に広くなり、ホールのように丸い場所に出る。直径が何十キロもある広い空洞だ。そこが地球の中心であり、セミ丸はそこにいるのだ。

ウロコ丸の言つことは本当だつたのだね。ある場所を過ぎると

まわりの壁が一瞬で消え、本当に何もなくなってしまった。縦穴を抜け出し、ヘンリーたちは巨大な空洞の中に出たのだ。「地球の中だわ」アンナが声を上げた。「こんなになつていてるだなんて、思つてもみな……」

アンナの声が途切れてしまつたので、ヘンリーは顔を上げた。ある方向を向いて、アンナが大きく目を見開いていることに気がついた。その視線を追いかけ、アンナが見ているのが本人の右手首だとわかるのには時間はかからなかつた。もちろんそこにはパラシューのロープが結び付けてある。だが今、なんとその結び目がほどけていきつつあるのだ。「ジユディス、どうしよう」アンナは悲鳴を上げた。

だが手が届くはずもなく、ヘンリーにもどうすることもできなかつた。ロープがゆつくりとほどけていくのを見ていることしかできなかつた。

「ジユディス」アンナがもう一度絶望的な声を上げた。同時にロープは完全にほどけてしまい、アンナの手首を離れていつた。アンナはつかもうとしたが、間に合わなかつた。パラシユートを半分はぎ取られる形になり、ブレークの力が急速に弱まつたアンナはヘンリーを追い越し、一気に前に出ることになつた。

「アンナ！」

ヘンリーから離れ、アンナは暗闇の中をどんどん遠ざかつていこうとしている。二人とも手を伸ばしたが、もちろん届くはずはなかつた。悲鳴を上げながらアンナは見る見る遠く小さくなつていき、ランプの光だけは最後まで見えていたが、とうとうそれもわからなくなつた。悲鳴もかぼそくなり、聞こえなくなつてしまつた。

なんということだらうと思つたが、自分の体が風を切る音以外何ひとつ聞こえない暗闇の中、ヘンリーは降下を続けるしかなかつた。アンナのことばかり心配しているわけにはいかなかつたのだ。ここまで来たら、いつセミ丸と出くわしても不思議はない。ヘンリーは前方に目をこらしつづけた。

黄色っぽい光の中に、まわりの風景が浮かび上がり始めていた。しかしそれも垂直な壁ばかりで、左右のかなり遠くにうつすらと影のように見えているだけだ。着陸するにはどうすればいいだらうとヘンリーは考えた。見回し、少し離れたところだつたが、ドームのようく丸い大きな岩が見えていることに気がついた。表面が平らで、着陸するにはよさそうに思えた。パラシユートの角度を調節し、その岩に向けてヘンリーは進路をとつた。バランスを保ちながらブレーキも使い、うまく頂上に立つことができた。

岩の表面はつるつるしていたが、足を滑らせてしまつほどではなかつた。ロープをほどき、パラシユートを外して背伸びをして見回したが、本当にボールのように丸い岩の上だつた。まるで地球儀の上にとまつたハエになつたような気分だ。

アンナはどうなつただろうとヘンリーは思つた。セミ丸を退治するだけでなく、アンナを探し出すという仕事まで増えてしまつたわけだ。だが特に困難を感じていたわけではなかつた。ウロコ丸は後で必ず迎えにいくと約束していた。二人の目で探せば、アンナはきっとすぐに見つけ出すことができるだらう。どこかの岩壁に衝突して氣を失つているかもしれないが、ワロイを着ているのだから、ケガまではしていなだらう。

とりあえずセミ丸を探すことにしようと思つたが、足元の岩がぐ

らうと揺れたのは、そのときのことだった。とつさに何かにつかまろつとしたが、支えになる物は何もなく、ヘンリーはそのまま転んでしまった。だが足元はまだ揺れている。ヘンリーは岩から滑り落ちてしまいそうになつた。だから手近な岩の割れ目に手を差し入れ、しつかりつかまらなくてはならなかつた。そしてそのとき、これが本当は岩ではないことに気がついたのだ。

岩と同じように固いが、何かまったく違う材質でできている。ツメの先でコンコンとたたいてみたが、やはり岩とは違う音がする。指先でそつとなでてみた。覚えのある手触りだという気がした。と同時に岩がもう一度大きく揺れ、今度はグルリと横倒しになりはじめたのだ。ヘンリーはもう一度両手でつかまらなくてはならなかつた。だが失敗し、とうとうヘンリーは岩の上を滑り落ちていくことになつた。

気がついたときには長い棒のようなものの先につかまり、ヘンリーはだらつとぶら下がつていた。足の下には何もない。目の前に巨大な目玉があることに気がついた。だが巨大といつてもウロコ丸の目玉どころの話ではなく、家ほどの大きさがあるのだ。それも一つではなく、四つか五つ目に入る。ヘンリーは、自分がセミ丸の目の前にいるのだとやつと気がついた。

だがセミ丸は、ヘンリーの存在になどまったく気づいていない様子だつた。小さすぎて目に入らないのだろう。ヘンリーは知らずにセミ丸の背中に着陸してしまつたらしいが、振り落とされて、今はその触角の先にからうじてつかまつているのだつた。

ランプの光が届く範囲など知れている。だからヘンリーには、セミ丸の顔の一部しか見ることができなかつた。だが顔の一部だけでの大きさがあるのだ。全体はどのくらいあるのだろうとこう気が

した。戦艦の大きさなどとくに越えてしまつてゐるに違ひない。今ではきっと、ちょっとした島ほどはあるのだわ。

ほんやりとだつたが、セミ丸の背中が青白く輝き始めていたことに気がついたのは、そのときのことだつた。まるでホタルのように光を発しているのだ。背中の中央の平らな一部分だが、それでも町を一つ建設できるほどの広さがある。ポケットの中に手を入れてヘンリーは気がついた。ポケットの中は空っぽなのだ。胞子の入ったガラスびんはアンナが持つてゐるのだとこいつことをやつと思い出した。

触角の先にぶら下がつたまま、ヘンリーは眺めていたことしかできなかつた。セミ丸の背中の輝きは、だんだんと強くなつていつた。いかにも地底の生物らしい青白い光だが、それが雲を通して見る稻妻のようにまで強さを増し、地鳴りのような音が耳に届き、セミ丸の背中にビビが入るのが見えたとき、ヘンリーがどれだけ驚きを感じたか想像するのは難しくはないだらう。あの分厚さの皮膚が裂けるときには、地震と同じような音がするということなのだろう。触角の先にいても、びりびりとした振動を感じ取ることができたほどだつた。

何が起つてゐるのだろうと、もちろんヘンリーは田をこらした。セミ丸の皮膚が裂けて、その下にあるものが姿を見せつつあるのだと突然気がついた。幼虫の背中が割れ、その裂け目がどんどん広がり、成虫の姿があらわになりつつあるのだ。つまりセミ丸は、脱皮して大人のセミになろうとしているのだ。

数分後にはセミ丸の身体全体がほんやりと光り始めていた。おかげで空洞の内部が明るく照らされるよつになつた。だがこの広い地中の空洞も、セミ丸にとつては狭すぎるに違ひない。脱皮を終えて

一枚の羽根を伸ばすと、もう一ぐらも余裕はないだろう。地球はすでにガタガタになつていて、ミミズの長老は言つていた。セミ丸が頭突きの一、二回もやれば、地球は本当に壊れてしまうかもしない。だがヘンリーにはどうすることもできなかつた。触角の先につかまつているほかなかつたのだ。セミ丸の大きさに比べれば、ヘンリーなどノミのようなものでしかなかつた。

セミ丸は脱皮を続け、もう身体の半分以上が外に出てしまつてゐる。幼虫時代の古い皮膚をコートのように脱ぎ捨てつつあるのだ。両腕に力を込めて、ヘンリーは触角の上にはい上がることができた。触角といつても太さは大木ほどもあるので、その上に立つことだけができる。触角をたどつて、ヘンリーはセミの本体へ向かつて駆け下りていつた。

だがあの巨大な体なのだ。息を切らせてヘンリーがやつと頭の上にたどり着くころには、セミ丸はもう脱皮を終えてしまつていた。脱ぎ捨てたカラの上に立ち上がり、いかにもせいせいしたという様子で身体をまっすぐに伸ばしてゐる。折りたたまれていたときの名残りで羽根はまだしわくちゃだが、そのうちにこれもまっすぐになるのだろう。きつとその上に立つと、地平線まで続く大平原のような眺めに違ひない。

ヘンリーは再び走り始めたが、セミ丸の体はまだやわらかく、一歩進むたびに足の下でグニヤリとへこむ感じがする。ヘンリーには何かのあてがあつたわけではない。ただ、すぐにヨロイのように硬くなつてしまつて、やわらかい腹がある後部へ行くほうが役に立つような気がしていただけだ。だがセミ丸はあまりにも巨大で、すっかり伸びきつた羽根を動かし、飛び立つ気配を見せ始めたときにも、ヘンリーはまだやつと背中の中央あたりに達したところでしかなかつた。セミ丸の身体が突然ぐらりと搖

れたので、ヘンリーは転んでしまった。

セミ丸がとうとう飛び立つ気になつたのだと気づいて、ヘンリーはひどくあせりを感じた。頭突きの2、3回もやれば、地球など簡単にばらばらになつてしまつだろ。もう猶予はなかつた。だがどうしていいかわからず、絶望的な気分でまわりを見回すしかなかつた。見上げると、アンナと一緒に落ちてきた穴が大きく口を開けているのが見えた。岩盤の天井に開いた巨大な穴だ。まるで大洋の大洋をさかさまに見上げているときのような気がする。そしてその瞬間、奇妙な思い付きがヘンリーの心を満たしたのだった。

あまりにも奇妙なことなので、真実たりえるかどうか自信はなかつた。もちろん立ち止まって考えている余裕などなかつた。だが事態はヘンリーなど置いてけぼりにして、どんどん先へ進むつもりのようだつた。見上げている黒い穴のはるかかなた、上空何キロも先にオレンジ色の小さな光が見えているような気がしたのだ。本当にそうなのかと思わず眺めなおしたが、やはりその通りで、「あーっ」というアンナの悲鳴とともにその光がどんどん大きくなつてくるではないか。

ヘンリーはよけるのが精一杯だつた。まるで石ころのように落ちてきて、ヘンリーから一メートルも離れていない場所で、アンナはまだやわらかいセミ丸の背中に衝突した。激突と呼ぶほうがいいかもしれない。だがコロイを着た体は大砲の弾のように硬かつたのだる。「ベリン」と音がして、アンナの身体がすっぽりと入つてしまつほど大きな穴がセミ丸の背中の中央に開いたではないか。近寄つておそるおそるヘンリーがのぞき込むと、もちろんアンナと目が合うことになつた。不満そうな声がすぐに聞こえたのは言つまでもない。「見てないで早く助けてよ」

ヘンリーが手を伸ばすと頭を振りながらはい出してきたが、いかにも腹立たしそうに「アンナは大きな声を出した。「私たちが飛び降りた大穴はね、ここを過ぎてもずっとずっと下まで続いているのよ。まっすぐに行って、地球の中心を通り過ぎているんだわ。ジュディスとはぐれた後、落下してもののすくくスピードがついて、私は地球の中心を通り過ぎてかなり向こいつまで行って、いつたんは停止することができたのだけど、今度はすぐに逆向きの重力に引かれて、また戻ってきたのよ。まるで振り子みたいだつたわ。地球の裏側まで行つてきたに違ひないわよ」

興奮して、アンナは早口に話している。口を閉じさせたのは、ヘンリーも少し大きな声を出す必要があった。「アンナ！」

「だからあたしね…」

「アンナ」

「どうしたの？」まん丸な目で、アンナはヘンリーを見上げた。

「おまえは今、ヤミ丸の背中の上にいるのだよ」

「えつ？」

「胞子の入ったガラスびんはどこにある？」

「ここにあるわ」アンナはポケットに手を入れ、顔色を変えた。「あれ、ない」

アンナがいるとあらゆるポケットに手を入れ、だんだんと青ざめていく様子をあきれた顔をしながらヘンリーは眺めることになった。

「いや、アンナは、どこかでビンをなくしてしまったようだつた。

ヘンリーはあきらめ、まわりを見回した。こうなつては何か別な方法を探すしかないが、突然またアンナの大きな声があたりに響いた。「あつた」

顔を輝かせ、アンナはある方向を指さしている。セミ丸の背中に自分が今作つたばかりの穴の底だ。のぞき込むと彼女の言う意味がわかつた。穴の底にはあのビンがあり、衝突の衝撃でガラスにビビが入り、中身が少しこぼれてしまつていて。粉のように黒いあの胞子だが、スプーン一杯分ぐらいが外に出ていてるではないか。この次に起こつたことはまるで早回しの映画のようで、本当に目にもとまらないほどだつた。それほどすばやく、いろいろなことが立て続けに起こつたのだ。

アンナが開けた穴の内部では、ゆっくりとではあつたが、出血が始まつていて。セミ丸は痛みなど感じてもいなかつたのだろうが、昆虫独特の薄青い血液が、その穴をまるで池のように満たしつつあつたのだ。やがてその血が胞子に触れ、水につけたスポンジのようになしつと濡らせるのが見えた。胞子はこの瞬間を百年以上待つていたのだろう。セミ丸は地球の養分を何世紀にもわたつて吸い続けてきたのだ。その血液は栄養で満ち満ちていたに違ひない。胞子は、白い糸のようなものを見る見る伸びし始めたのだ。「あれは何？」アンナが声を上げた。

「ああ、見たことないものだ」

それは本当に白い糸のよう見えた。胞子から出で、ひとりでにさつと伸びていくのだ。その数は何百本もあるだろう。それが互いに組み合わさりながら複雑に交差して網のようなものを作つていく

様は、糸を吐きながらクモが巣を作つていくときのよつた眺めだつたが、もちろんクモの姿などないのだ。

「氣味が悪いわ」二人は思わず一步下がつた。そのとたんセミ丸が大きく体を動かしたので、二人とも転んでしまつた。だがその間もあの白い糸のようなものはさかんに伸び続け、網は濃くなり、もうそろそろ穴からもはい出してきつつあつた。立ち上がりながらアンナが言つた。「あの白いのつて、やっぱりカビなのよね？」

だが観察している余裕などなかつた。カビはついに穴を飛び出し、セミ丸の背中を白いじゅうたんのようにおおいながら、猛烈な勢いで四方へと広がり始めていたのだ。手をつなぎ、二人は走り始めるしかなかつた。だが自分たちがセミ丸の頭の方向へむかつて走つているのだと気がついたのは、かなり前進してからだつた。丘のように盛り上がつた場所を下つていきながら、そのむこうにセミ丸の巨大な目玉がいくつも見えてきたのだ。

「まさかあのカビも、ここまでは追いかけてこないわよね」立ち止まり、二人は振り返つた。だがアンナの予想はまったく外れていた。カビは背中のほんどうすでにおおいつくし、一部はもう首の付け根にまで到達していたのだ。

白いカビは、セミ丸のしつぽがある方向へももちろん腕を伸ばしつつあつた。離陸に備えてセミ丸はすでに羽根を忙しく動かし始めたのだが、その付け根に達するとカビは羽根の動きをさまたげ、はばたきを一瞬ゆるめさせることになつた。だがセミ丸も込める力を増したのだろう。すぐに羽根はまた同じように激しく動き始めた。しかしそれも、カビが羽根の付け根全体に取り付くまでのことではなかつた。羽根は再びゆつくりと動きを止め、セミ丸は苦しそうに身体をよじつたが、もう一度と羽根を動かすことはなかつた。そ

の間もまったく休みなく、カビはセミ丸の身体の上をじんじんおおつていたのだ。この戦いを、ヘンリーとアンナは口をぽかんと開けて眺めていた。自分たちの身にもトラブルが降りかかるうとしていることに先に気づいたのはアンナだった。「ねえ見て」アンナはおびえたようにキョロキョロした。

やつとヘンリーも気がついた。一人はセミ丸の背中の上でカビにおおわれずにわずかに残った小鳥のようなどこにこして、五十メートルも離れるともう雪の日の朝のようにすべてが白くおおわれてしまっているのだ。そしてカビの勢いには衰える気配などなく、今もじつじつと一人に向かって迫ってきつつあるのだ。「どうするの?」

「うつちだ」アンナの手を引き、まだ白くおおわれていの場所をたどつて、ヘンリーは走り始めた。だがすぐに行き止まりになってしまった。そこはセミ丸の背中のはじで、地面が田の前で崖のようになづらと終わっているのだ。見下ろすと、その先には何もない。

「飛び降りるの?」アンナが言った。

「それしか手はあるまい?」

「私は嫌よ。それよりもあの触角に手が届けばいいのだけど」アンナは少し上を見上げている。視線を追いかけて、ヘンリーも気がついた。セミ丸の触角の長い先端が頭のあたりからずつと伸びてたれさがり、ほんのすぐそこまで来ているのだ。

セミの触角とは見かけによらずやわらかく、かつ強いものだった。肩の上に乗せるとアンナは手を伸ばし、つかんで引き寄せることができた。アンナはよいしょと体を乗せ、まるでサルのようにヘンリーも両手でぶら下がることができた。一人の体重が乗ると触角はゆ

つくりと動き、自然に向きを変え始めた。適当なところまできたところで手を離し、ヘンリーたちはセミ丸の顔の上につまく着地することことができた。

セミ丸の田玉は本当に大きく、半球形に盛り上がり、表面はガラスのようにつるつるとランプの光を反射している。だがもうセミ丸には何も見えてはいないのかもしないとヘンリーは思った。怖がらせることになるかもしれないとアンナには指摘しなかつたのだが、よく見るとやつの瞳の奥にまで白い糸の影を見ることができたのだ。

「カビもここまでにはこないわよね」首をすくめ、アンナはキヨロキヨロ見回している。ヘンリーも同じようにしたが、体の内側はともかく、セミ丸の体表にいるカビもここまで届かないようだつた。ほつと息をつき、アンナと一緒にになってヘンリーも腰を降ろすことになった。

何分もたつてやつと「私たちはここでウロコ丸を待つていればいいのよね」とアンナが口を開いたが、二人がおとなしく座っていることができたのも、実はその瞬間まででしかなかった。さつきとは違う揺れ方だつたが、突然再びセミ丸の体が激しく震えはじめたのだ。

「何が起こってるの？」悲鳴を上げ、アンナがしがみついてきたが、何がどうなつているのか見当がつかないのはヘンリーも同じだつた。そしてその後、何が起こつたと思つ? ミミズたちはカビの胞子だと言つていたが、キノコとカビは親戚同士だなんて、ヘンリーもアンナもまったく知らなかつたんだ。この間にもセミ丸の皮膚の下では、カビの白い糸が猛烈な勢いで繁殖を続けていたのだろう。セミ丸は何世紀にも渡つて地球から養分を吸収していたのだから、さぞかし栄養があり、食べがいもあつことだろう。カビは急行列車のような勢いで成長し、あつという間にセミ丸の体の内部をすみずみまで占領してしまつたに違ひない。だがそれでも栄養はつきず、皮膚を突き破つて外にまではみ出し、カビの糸はとんでもなく太く、ついには柱のようになつてセミ丸の体を上へと持ち上げ始めたのだ。

この柱は太く、樹木のように丸い断面をして、まるで頭の上にセミの死骸を乗せたキノコのような姿に見えたに違ひない。直前に気づき、ヘンリーたちはセミ丸の皮膚の深いしわの中へとつさに飛び込むことができたから良かつたが、そうでなければ、あつという間にペちゃんこに押しつぶされてしまつたに違ひない。

それでもすさまじい音と振動に襲われはした。成長するキノコの圧力で大地が押し破られる場に居合わせたのだから、それも不思議

ではないだろう。砂ぼこりだけでなく、小石や石ころがヘンリーたちの頭上に降り注ぐことになつた。一かかえもありそうな石までがときどき落ちてきたが、それにぶつかることがなかつたのは幸運としか言へようがない。ずいぶんと長い時間に感じられたが、手足を縮め、ヘンリーたちは狭い隙間にノミのように小さくなつていた、大地震のときのようにセミ丸の体は揺れ続け、大地が引き裂かれる音が聞こえてくる。ありとあらゆる方向から砂や石が降り注いでくる。神経を張り詰めた状態があまりにも長く続き、アンナでなくても何かの拍子に気を失つてしまつるのは不思議でもなんでもないではないか。

実を言つとヘンリーもそうだったのだ。目を覚ましたのはきっと何時間も後だったに違いないし、見回して自分が地表にいることに気がついて、ひどく驚いたものだつた。地表というのは正真正銘の地上という意味であり、ジユディスが治めている『下の世界』のことではない。それがわかつたのは山の形に見覚えがあつたからで、ヘンリーはなんと、村から山道を登つていつた先にあるあの砂丘にいるのだった。何日か前、アンナと一緒に馬に乗つて越えようとした砂丘だ。あの直後にヘンリーたちは砂に足を取られ、『下の世界』へと落ちていつたのだ。

砂丘の砂を大きく押し分けるようにして、セミ丸はその背中を地上にぐいと突き出しているのだった。それ自体が黒い岩山のような眺めだつたが、ヘンリーはその頂上に乗つかつていたのだ。もちろんアンナも一緒で、ヘンリーの足元に倒れているが、ゆっくりとおなかが動いているから、ちゃんと呼吸をしていることがわかる。ただ気を失つているだけなのだろう。

ヘンリーはもう一度まわりを見回した。眺め直しても山々の形は記憶の通りで、村のすぐ近くだというのは間違いない。日が暮れて

何時間もたつてゐるようで、空には星と月が光つてゐる。その光のせいで、洗い立てのシーツのよつこじまこしながら、砂丘は青白くどじまでも長く伸びてゐるのだ。

「よかつた。」無事だったのですね

突然声が聞こえたので振り返ると、リンゴ姫の姿が田に入るではないか。上半身をすつと起こして立ち、じつにこちらを見つめているのだ。どう答えていいかわからず、ヘンリーは口をぽかんと開けていたが、こいつの間に田を覚ましたのか、アンナも驚いた声を出した。「どうしてここにリンゴ姫がいるの？ そもそも、じつてどいなの？ セミ丸はどうなつたの？」

「セミ丸は死にました」リンゴ姫は答えた。「あなたたちのお手柄です」

「セミ丸は死にました？」おそるおそる首を突き出し、アンナはきょとんきょろした。

「地上だよ」とヘンリーは答え、胞子が植えつけられたあと何が起つたのかを説明し始めた。はじめアンナはよくわかつていらない顔をしていたが次第に表情が変わり、最後は笑顔になった。

「じゃあ私たち、地球を救うことができるのね。すじい冒険だわ。学校へ帰つてみんなに自慢できるわ」

「僕たちの話を誰かが信用してくれたらね」と思わずヘンリーは付け足さないではいられなかつた。

「どうして？」

リンク姫はヘンリーたちを見つめた。「やわらかな砂を突き破つたので、地上の人々はセミ丸がここに現れたことには気がついていないでしょ。一番近くの村でも、せいぜい小さな地震としか感じなかつたことでしょう」

「じゃあ私、同級生のみんなをここまで連れてきて、セミ丸の姿を見せてやるわ。目の前で見れば誰だつて信用するわよ」アンナは口をとがらせた。

「それでもジョージなんかは信じないだろ？」ヘンリーは言った。

「ああ、あのパン屋の息子ね」アンナはうなずいた。「あいつは2週間前から売れ残つて、いるパンよりももつと頭が固いわ。だけどもしこのセミ丸を目の前に見れば……」アンナは顔色を変えた。「ちょっと待つて。ジュディス、どうしてあなたが村のパン屋のせがれのことを知つているの？」

「どうしてつて」「ヘンリーは口を滑らせてしまつた。「アンナも僕も、ずっと以前からジョージとは同じクラスにいるじゃないか。サンダース先生だつて……」

「なんであんたが私の小学校の先生の名前まで知つているのよ」

やつとヘンリーは自分の失敗に気がついたが、もちろんもう遅かつた。くすりと笑う声が耳に入つて、ヘンリーとアンナはリンク姫を振り返ることになつた。「秘密をばらしてしまつても、もうよろしいのではありませんか」リンク姫は明るい声を出した。

「秘密つて何よ？」両手を腰に当て、アンナは突然ヘンリーをにら

みつけ始めた。

「ううん、なんでもないよ」背の高いジュディスの姿のまま、ヘンリーは思わず後ずさりをした。

「なんなのよ」

「本当にもうよろしいのではありますか」またクスリと笑い、リング姫はいつの間にかヘンリーの背後に回っていた。そして長い鼻を器用に使い、ヘンリーの首からあの首飾りを引き抜いてしまったのだ。あつと思つたときには遅かつた。ヘンリーはもうジュディスではなく、元の男の子の姿に戻つてしまつていた。

「あつ」ヘンリーと同時に、だがヘンリーよりもはるかに大きな声をアンナが上げていた。この後アンナがどれだけ腹を立て、それをなだめるのにヘンリーとリング姫がどれだけ骨を折つたか、想像するには難しくはないだらう。ヘンリーは髪を引っ張られ、2、3カ所引っかかれた。リング姫までハツ当たりをされ、体中に砂をかけられた。

「まあまあ、もう戻つてはあつませんか」リング姫は言った。

「よくはないわよ。私がヘンリーのことをどれだけ心配して、あちこち探し回つたことが」最後にヘンリーの背中をドンと思いつきりけつ飛ばして、ようやくアンナも気がすんだようだつた。

「でもそれって何なの?」アンナの関心は、リング姫が鼻先にぶら下がっている首飾りにすでに移つてゐるようだつた。アンナが背伸びをするので、よく見えるようこりング姫は少しかがんでもやつた。

「とてもきれいな首飾りだわ」とアンナ。

「！」の首飾りを身につけると、誰でもその姿がジュテイスに変わるものですよ」 リンゴ姫は言った。

「どうして？」

「それは誰にもわかりません」 リンゴ姫は首を横に振った。「でも『下の世界』では、何百年もそうやって女王を決めてきたのです。この首飾りさえあれば、誰だってジュテイスになることができます」

「たとえそれが、どんないたずら小僧であってもね」 アンナが横目でにらむのであわてて目をそらし、ヘンリーは知らん顔をした。

「だけれど、姫」 アンナは表情を変えた。「どうしてあんたがここにいるの？」

「はい」 リンゴ姫はうなずいた。「胞子が植えつけられ、カビが成長してセミ丸の体を地上へ向かって押し上げ始めたとき、もちろんミニアズの国でもその振動を感じることができました。だから父に命じられ、私が様子を見にきたのです」

「へえ」

「これでセミ丸は退治され、一仕事すませることができました。でも次に、これをどうするかが問題ですね」 小さくため息をつき、リンゴ姫は首飾りをかすかに振つて見せた。

「ふん」 アンナが鼻を鳴らした。「またヘンリーが首にぶら下げて、お偉い女王様になつてお城へ戻ればいいわ」

「それは不可能なんだよ、アンナ」ヘンリーが事情を説明すると、アンナはまん丸な目をもつと丸くした。

「へえ、じゃあどうするの？ そうだわ」アンナは突然顔を輝かせた。「ヘンリーにできたのなら、私にだってできるはずよ。私がジコディスになっちゃおうか」

「ヘンリーはどう答えていいかわからなかつた。だがリンゴ姫は静かにじつはつた。『それはあまりお勧めできません』

「どうして？」ヘンリーたけは振り返つた。

「ほら、夜が明けますよ」とがつた鼻を向け、リンゴ姫が教えてくれた。確かにその通りで、空が明るく変わり、山々のへりが金色に光り始めている。黒かつた空は青みがかり、星や星座もつづりと姿を消しがけてくる。

「朝になつたのね」アンナが言つた。

「ここは雪山の影ですから、村ではもう少し前から明るくなつていことでしょ。冒険の旅に出発したあの日、あなたたちが村を離れたのは何時？」とやした？

「夜が明けるのと同時にくらこよ」アンナが答えた。「どうして？」

「ならば、お一人の姿がもうすぐあるあたりに見えてくるはずですね

「何ですって？」ヘンリーとアンナは、リンゴ姫がしめしがるあ

たりを見つめた。ここからは少し距離があり、砂丘のはしのあたりだ。村から山道を登つてきて、砂の上に最初に足を踏み入れる場所だ。

「どうこいつ」となんだい？」ヘンリーは見つめたが、リング姫は微笑むだけだった。

「もう少し待ちましょう。そうすればわかります」

だからヘンリーたちは待ち続けた。セミ丸の背中から降りて小さな砂の丘を越え、もう少し見えやすい場所まで移動したのだ。リング姫の言つとおり、馬に乗つたヘンリーとアンナが遠く小さく姿を現したのはそのときのことだった。まだ日をこらさなくてはならぬいほど距離があるが、馬の毛の茶色と、朝日をはね返すワロイの輝きは見間違いようがない。あれは確かにあの朝のヘンリーとアンナだ。「何がどうなつてゐるの？」アンナは不思議そうな声を出したが、ヘンリーもまったく同じ気持ちだった。

「////ズの国へやつてくる直前に」リング姫が口を開いた。「あなた方は砂時計をさかのぼつたでしょ？」

「あの大きな砂の山ね」

「砂時計も時計の一種なのですよ。それをさかのぼつたのだから、時間が少しごらい巻き戻つてしまつても不思議はないでしょ？」

「何ですつて？」アンナは大きな声を出したが、リング姫は微笑んで見つめ返した。

「本当のことなのですよ。あなた方は今、村を出て冒険の旅に出発

したあの朝にまで時間を戻つてきているのです

アンナだけでなく、ヘンリーもぽかんとした顔をしているのをリンゴ姫は楽しそうに眺めていた。三人ともしばらくの間黙つて、遠くにいるあの一人の様子を眺めていたが、やがてアンナが口を開いた。「彼ら、あそこの一人はこれから砂の流れに巻き込まれて、『下の世界』へ落ちていくといふの?」

「やうらじじいね」ヘンリーはうなずいた。

「じゃあすぐ助けないと。今すぐ教えてやらないといけないわ」

歩き出でやうとしたアンナを、リンゴ姫が長いしつぽを使って押しつぶした。「ダメですよ」

「どうして?」

「あの一人にはこれから砂に巻き込まれて、『下の世界』へ行つてもらわなくてはなりません。そうでないとセミ丸を退治することができないといけないのね」

アンナは振り返り、セミ丸の黒い体を見上げていたが、少しつつヘンリーたちのほうを見た。「わかつたわ。地球を救うためにはそうならないといけないのね」

遠くにいるもう一人の自分に向かつてアンナは目を走らせた。「でもかわいそ。あのアンナはこれから、あのつらい思いを経験するんだわ」

どう言つていいかわからず、ヘンリーとリンゴ姫は黙つていた。

だがアンナが明るい表情で振り向いてくれたので、一人ともほっとすることができた。「ところでの砂崩れはどうして起きたの？何かきっかけがあつたのでしょうか？」

リンゴ姫が答えた。「あの砂崩れは自然に起きたのではなく、誰かの手でわざと起されたものなのですよ」

「どうして？ 誰が起したの？」

「それを今からお目にかけなくてはなりませんね」一步前に出て、リンゴ姫は首飾りを鼻先高くかげた。それが彼女の頭の形にそつてゆつくりと滑り落ちていくさまをヘンリーたちは眺めることになつた。ミミズの肌は湿り氣をおび、つるつるしているから、さぞかしスムーズに滑つていつたことだらう。そしてついにはリンゴ姫の首にかかり、首飾りはそこで停止したのだ。その間もリンゴ姫は話し続けていた。

「ただ『下の世界』の支配者だというだけではなく、砂時計の管理者でもあるので、砂たちはジユディスの命令に従います。それはつまり、ジユディスの言うことであればなんでもきくということだ。だから今から私は、砂たちに命じてセミ丸の死体を田に付かぬよう地球の中心にまで運び去らせるこにしよう。やつはあそこで大きく育つたのだ。その墓場としても適当であるう？」

「でもあの…」背の高いジユディスを見上げたまま、ヘンリーもアントナも何を言つていいかわからなくなつてしまつた。肩にそつと触れ、馬とともに歩いているあの一人の方向へ、ジユディスはヘンリーやたちの視線を向けさせた。セミ丸を運び去る準備がもう始まつているのか、砂たちがざわめく振動を足の裏に感じることができる。

そしてついにそれが始まったのだが、なんという早業なのか、セミ丸はそれこそあつという間に姿を消してしまったのだ。あの巨大な体が、まるで船が沈没するときのように砂の下へと見えなくなってしまった。そのあと砂丘の表面は、はじめから何もなかつたかのような平らな砂だけになり、セミ丸が遠ざかっていく「ゴツゴツ」とした振動だけは少しの間感じることができたが、やがてそれもまったく消えてしまった。

砂丘の内部で何百メートルもの厚さに積もっている砂がどういう構造をとつてているのかはもちろん知らなかつたが、きっとただ眠たく積み重なつてているのではなく、海の流れのように複雑で、嵐の日の雲の群れのように生き生きとした動きをしているのだろうかとヘンリーは想像してみた。その生き生きとした動きがただ人間の目に見えないというだけで、砂丘の意外な場所同士が実は地下トンネルのように互いにつながつてているということなのか、セミ丸が運び去られると同時に、何百メートルか離れた別の場所では砂に大穴が開き、馬を連れたヘンリーとアンナの足元が突然崩れ始め、まるでアリ地獄のようにのみこんでしまつたということなのかもしれない。

遠くにいるあの一人の姿が砂の下へと消えてしまうのはジュディスとともにいるここから見ていてもよくわかつたが、それでもほんの一瞬の出来事でしかなかつた。しかし運がよかつたのか、強い脚力のおかげなのか、馬だけは砂のウズからなんとか脱出することに成功していだ。足を取られながらもきつい斜面を一步一歩登り、砂の動いていない安全な場所まで逃げ延びることができたのだ。隣にいたアンナが駆け出したことにヘンリーが気づいたのはその瞬間のことで、砂の上に足跡を飛び飛びに残し、馬に近寄つてたづなを取るつとするのが見えた。そうやつて彼女が戻つてくるまでの間、ヘンリーはジュディスと一人きりになつた。「ねえジュディス…」

ジュディスは黙つて振り返つた。手を伸ばし、ヘンリーは彼女の首飾りにほんの軽く触れた。「あんたは、これからもずっとその姿のままでいるつもりなの？」

「わかりません」ジュディスはリング姫の声で答えた。「一度////ズの国へ戻り、父とも相談してみようと思います」

「ふうん」

「適当な人がいれば、すぐにもこの首飾りを手渡すことができましょ。下の世界の人々とも話してみる必要があるかもしれません」

「そうだね」

「これでお別れですね」軽くかがみ、ジュディスはヘンリーのほおにそっとキスをしてくれた。

「何の話をしているの？」馬の足音が近づき、同時にアンナの声も聞こえたので振り返ると、たづなを引いてここまでやってくるところだった。

「大したことではない」女王の声でジュディスは答えた。

「そうなの。ああそうだ」アンナは何も気がつかなかつたようだつた。「ねえジュディス、ウロコ丸に会つたら言つておいてよ。もう地球の中心まで私たちを迎えて行く必要はなくなつたからつて」

「そうだな。伝えておこう」ちらりと見つめあい、ジュディスはヘンリーに微笑みかけた。

「わあ行くわよ」そばへやつてきて、アンナがヘンリーの腕を引いた。

「どうして？」

「村へ帰るのよ。急がないといけないわ」アンナは答えた。

「どうして？」

「何言つてるの？ 郵便配達人がやつてくる前に家に帰り着いていないと、あの手紙が両親に見られて大変なことになるじゃないの？」

ヘンリーは思い出した。『しばらく冒険の旅に出ます』と書いたあの手紙だ。アンナの言つことはもつともだつたので、ヘンリーたちはあわただしく出発することになった。リンゴ姫にお別れを言つてゐる暇も十分にはなく、ヘンリーを馬の背に押し上げ、自分はたづなを引いて、半分駆け出すよつにしてアンナは砂の上を行き始めたのだ。ヘンリーは何度も振り返つたが、ジュディスは手を振りもせず、それでもその場に立つたまま見送つてくれた。だがいくつ目かの砂丘を乗り越えたところで、その姿もとつとう見えなくなつてしまつた。

「いやつて、ヘンリーとアンナは村へ帰つてくることができた。まるで何事もなかつたかのように朝食のテーブルにだつて着くことができた。昼前には門の前に立ち、郵便配達人を待ち構えていた。誰にも見られる前に、手紙は一通ともうまく取り戻すことができた。

誰も信じないだろ？とヘンリーは言つたし、一度はアンナもそれで納得したのだが、やはりあきらめきれなかつたのだろう。夏休みが终わり、学校が始まつて1週間もたたないうちにアンナは言い合

いをはじめていた。もちろん相手はパン屋の息子だった。強いくせ毛の持ち主で、乾ききった松ボックリのように広がった髪を激しく左右に振り、「そんなバカなことあるもんか」ヒジョージは大きな声を出した。

「本当だったら本当なのよ」アンナは負けずに言い返した。

「地球の中心まで潜つていって、おまえとヘンリーが大怪物を退治し、世界を救つただなんてウソに決まってらあ」

「ウソじゃないわよ」アンナの声もだんだん大きくなつてくる。休み時間のことだったが、その声が職員室にまで届くのではないかとヘンリーははらはらし始めた。

「ヘンリー、あんたも何か言いなさいよ」突然振り返り、アンナはヘンリーをにらみつけた。

「僕は…」

「弱虫のヘンリーなんかには、小さなミミズだつて殺せるもんか」ヒジョージが言った。「なんてといったつけ？」アンナの話に出てきたヘビ。体全体が緑色で、でかい一つ目のやつさ。ウロコ丸とかいつたな。そいつを連れてこいや。オレが小指の先でやつつけいやらあ

「ところがこのとき、誰かが廊下を行く物音がドアの向こうから聞こえてきたので、口論はこれまでになつた。騒いでいたせいでベルが耳に入らなかつたのか、いつの間にか休み時間が終わっていたらしい。きっとあれは先生だろ？」

みんな、もちろんあわてて席に着いた。足音らしさの物音は教室の

すぐ外で立ち止まつたが、いくら待つてもドアが開く気配はない。どうしたのだろうと子供たちが不思議に思い始めたころ、閉じたままのドアの向こうからとうとう声が聞こえてきた。「なあ誰か、このドアを開けてくれないかな。先生を抱えたまま、オイラ一人じゃ無理でわ」

ヘンリーは立ち上がり、ノブに手をかけた。そしてドアを開けたのだが、最初に田に入ったのはぐつたりとなつたサンダース先生の姿で、何か強いショックを受けたのか気を失つてしまつているようだ。ここまで床の上を引きずつてきたらしいが、困ったような顔で先生を支えているのがウロコ丸だつたのだ。あの大きな瞳と見つめ合つことになつてヘンリーは田を丸くしていたが、ウロコ丸が口を開いた。

「ああ、じじにいてくれて助かつたよ。地球の中心でどんな冒険をし、セミ丸をじうやつて退治したのか聞きたくてやつてきたんだが、職員室に顔を出して、あんたらがいるのはどの教室かと尋ねようとしたらいのやまでさ」

「だがサンダース先生の意氣地のなさだけを笑うのは不公平かもしれない。じばらくしてやつと気がつき、ヘンリーとアンナはキヨロキヨロ見回したのだが、教室の中はもう空っぽで、かれら一人とウロコ丸以外、あつという間に誰もいなくなつてしまつていたのだ。

「ちょっとまずかったかな」とウロコ丸はつぶやいたが、それを聞いてアンナはくすくす笑い始めた。少しの間は我慢していたが、つられてとうとうヘンリーも声を立てて笑い始めた。そこにウロコ丸まで加わり、いかにもへビらしく舌をシュー・シューと出し入れしながら忍び笑いを始めた。だが三人が平和に笑つてはいることができたのも、教室のすみにある物入れの中からゴトンと小さな音が聞こえ

てぐるまでのことだった。

三人はどきりとし、首をすくめて静かになつたが、最初に体を動かし、物入れのドアに手を伸ばしたのはもちろんアンナだった。さつと勢いよくドアを開くと、体を縮めて身を隠そうとしているジョージの姿が目に入った。頭を両腕でかかえ、足を精一杯に引き寄せ、掃除用具の間に体を押し込み、少しでも小さくなろうとしている。ウロコ丸が声を上げた。「地上の子供らの間では、物入れの中に入つて遊ぶのがはやつてるのかい？」

アンナとヘンリーはあきれた表情で顔を見合させたが、口を開く前にジョージの泣き声が聞こえてきた。ちよつと意地悪な気分になり、ウロコ丸に顔を近づけ、ヘンリーは少し耳打ちをしてやつた。アンナも面白そうな顔で聞いている。

「へえ」ウロコ丸の目が大きく、これも少し意地悪そうな表情に変わるのがわかつた。

「なあジョージ」せき払いをし、ウロコ丸は口を開いた。「早くそこから出てきて、小指の先一本でオイラをやつつけてくれよ。その勝負をするために、わざわざ地の底から来てやつたんだぜ」

「お客様を待たせるもんじゃなによ」調子に乗つてヘンリーも言った。

物入れのドアをけとばし、アンナはドンと大きな音を立てた。「出てこないとドアを壊して、引きずり出しちゃうぞ」

ジョージがさらに大きな泣き声をあげ始めたのは言つまでもない。三人はもう一度笑つた。だがすぐにウロコ丸が真顔になつた。「お

や？ あれはいったい何の音だい？」

アンナとヘンリーも耳をすませた。ウロコ丸が何のことかを言つてゐるのか、すぐに理解することができた。サイレンの音だ。『ひつやら消防車らしい。この町は小さすぎて警察署はなく、むちゅん軍隊もない。それでも通報を受けて消防団から駆けつけつつあるのだ』

「消防車ってなんだい？」ウロコ丸は言つた。アンナとヘンリーは説明してやつた。

「そいつがオイラを退治しにきたのかい？」ウロコ丸は目を丸くした。

「せうらじいわね」アンナはつづいた。

「いじしあや いられないや」ウロコ丸は体を動かし始めた。しつぽの先で物入れのドアを閉めてジョージを一人にしてやり、アンナとヘンリーを連れて校舎の外へと急いだのだ。ヘンリーたちはすぐに気がついた。校舎のすぐわき、背の高い木が一本立っているすぐ隣の地面にマンホールほどの大きさの穴が口を開けていて、ウロコ丸はそこからやってきたのに違ひなかつた。

頭からその穴の中に飛び込みざま、ウロコ丸が言つた。「じゃあな。冒険の話はジユディスからでも聞かせてもいい」とこするよ

「ええ、 セヨなら」

「セヨなら」

肩を並べてアンナとヘンリーが手を振っている間に、ウロコ丸の姿は穴の中へさっと見えなくなってしまった。消防車が到着し、手に手に木の棒や網を持った消防士たちが飛び降りてきたときには、地面には穴が一つ黒々と開いていただけだった。

(終)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8733f/>

女王の首飾り

2011年11月11日10時08分発行